

建築 社會

1948

NO. 1

KENTIKU TO SYAKAI



近畿電気工事株式会社

本店 大阪市北區梅ヶ枝町一六四宇治電ビル
電話 堀川 1916・1978番

支店 大阪北支店・大阪南支店・京都支店
神戸支店・姫路支店・和歌山支店・奈良支店・滋賀支店(大津市)・名古屋支店

營業所 吳 營業所 外 百 三 十 箇 所

材木ノ御用命ハ

是非當店へ

特産吉野材
山林・市場・一貫作業

特種挽立材
注文=應ズ

吉野工材株式会社 大阪營業所 所長 福谷秀穂

大阪市東區横堀四丁目(信濃橋東詰)
本社工場 奈良縣吉野郡大淀町下淵

マグネシヤタイル(化粧板)



華麗ナル磨硝子ノ光澤面
單色物及各種模様物
壁天井トシテ大理石代用
切截容易
裝飾ト共ニ耐火用ニ好適

製造元 三菱化成工業株式会社伊保工場

大阪市北區堂山町三八番地

取扱店 共成株式会社大阪事務所(電豊崎1843)

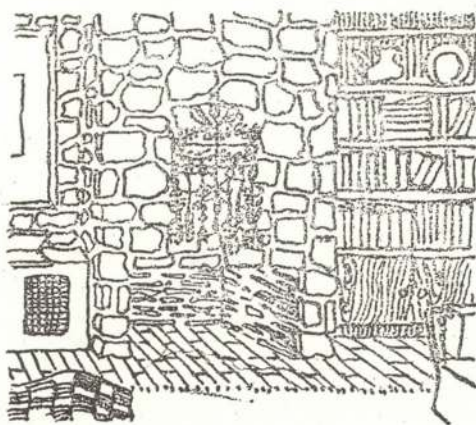
建築と社會

1

1948・7

目 次

これからの住宅・・・・・・・・・・	泉岩 傳一・2
將來の住居・・・・・・・・・・	北條 秀一・11
將來の住宅・・・・・・・・・・	西山 卯三・16
私の住みたい家・・・・・・・・・・	山本 一人・21
	末政 清子・22
	伊 豆 肇・23
すまいの工夫・・・・・・・・・・	柴 谷 邦・30
	竹内 さく・33
古 民 家 隨 筆・・・・・・・・・・	藤原 義一・7
舊K宮邸見學記・・・・・・・・・・	鞍馬 勉平・13
家・・・・・・・・・・	石田 一松・18
溫環境の測定について・・・・・・・・	梶原 三郎・36
住 宅 設 備・・・・・・・・・・	伊藤 正文・40
住宅問題と民主主義・・・・・・・・	稻葉 房藏・39
建 築 講 座・・・・・・・・・・	中野順次郎・44
グ ラ フ・・・・・・・・・・	羊 蹄 丸・中座
表 紙・・・・・・・・・・	祖 川 尙 彦
扉カット・・・・・・・・・・	大 林 芳 郎





1

私に與へられた題は『これからの住宅』といふいかにも心楽しさうな、未來の生活設計圖譜でもあむような感じを持たせる。事實それは希望と夢とを織りまぜて綴られる樂しがるべき筈のものである。だがひとたび『これからの住宅』についての前提條件とも云ふべき日本の經濟の現實と、その中で營まれつゝある住宅復興の現状に眼をやる時、希望と夢はもろくも崩れてゆく。

昨年の八月十八日參議院は本會議で『住宅問題について』の自由討論を行ひ、政府は當時の戰災復興院總裁の阿部氏に事務的な住宅復興の現況を報告させた。だが一人の大臣もこれに出席させなかつた。いやしくもいま國民にとつて死活の問題にひとしく、産業再建にとつては勞働力再生産上の絶對不可欠の鍵である住宅問題が、國民の議會で討論されるときに、一人の大臣も之に参加して充分に國民の聲をきかうとはしないのが『民主議會』である。これは政府が眞劍に住宅問題を取りあげてゐない證據である。

しかし例へ政府が不眞面目であるにせよこゝに一應敗戦以來の日本の住宅復興の全ぼうが明らかとなり、四百五十萬戸の不足住宅を充てて行くのに年々四十萬戸（内十萬戸は人口の自然増に對應する戸數、五萬戸は耐用年限當來による減少戸數、五萬戸は災害により消滅する戸數で、之らを差引きすれば正味二十萬戸）づつ建て、二十ヶ年かゝるといふ全く形式的な方針をきかされ、而も豫定の四十萬戸が該年度における物資需給計畫とにらみ合せて年間建設可能戸數は僅か二十五萬七千六百七十五戸であることが明らかとなつた。不

肖私は科學技術者として、科學技術の職能代表者の一人として討論に参加して、政府の復興方針に對して實際の計算をやつて見ると實は六十六ヶ年かゝることを指摘した。しかもこの半世紀以上に亘る年月を経て完成する住宅は、バラツクにもひとしき十二坪の倭少木造家屋に過ぎず、完成する頃には次第に耐用年限がやつて來て又々こうしたスラム化の悪循環が続いてゆくといふ全く馬鹿げたこととなる。

これでは『これからの住宅』も『今日の住宅』と何ら變るところがない。否、インフレの進行に應ずる今日の縮少再生産を見てみると、これからの住宅も亦縮少の一途を迎る危険性が讀みとれる。

2

どうしてかゝる不見識な問題が堂々國會に出てくるのであるか。それは七億七千萬圓といふ國費の千分の三にも満たぬ庶民住宅に對する國庫負擔額、月割りにして五千圓にしか當らぬ住宅調査研究費等に直接原因するが、そうした少額の費用しか住宅問題に計上し得ない政治の在り方と、それをそのまゝ受けてやつて行く官僚主義が根底に横たわつてゐる爲である。今日、日本の住宅復興を阻んでゐる要因を資材配分の僅少又は資材の絶對不足に歸し勝であるが、例へば主要資材たる木材の場合を考へても、現在内地産だけで年産約七千萬石、うち建築等に四千七百萬石廻すとすれば十二坪住宅なら年間百三十萬戸建つことになつて、問題は資材よりも寧ろ闇とインフレを促進さし、幾百萬の國民を餓死線上に追ひやつて再建をはからうとする政治の方式の中にある。

これは參議院の討論に於ても、ある自由黨議員等の臨時建築等制限規則の撤廢の要求となつて現はれてきた。勿論統制の中には幾多の改善すべきものが含まれてはゐるが、今日統制を廢したときに建つものは庶民大衆の貸家住宅ではなくして、より収益率の多い高級料理店乃至はダンスホール、マーケットに類するものばかりであることは火をみるよりも明らかである。庶民大衆の住宅は今日坪當り一萬圓とし建築費だけに十二坪で十二

萬圓、家賃を大ざつぱに二百分の一として六百圓これは住宅を求める勤務階級には手の出ない値段である。嘗ては日本の住宅經營は主として自由貸家業者の手にゆだねられ、都市に於ける貸家比率は七〇%にも及んでゐたが、今日これら自由業者による住宅經營は殆んど成立しなくなつた。即ち日本の都市貸家業は、零細な土地に零細式經營をもつて、絶えざる火災の危険と腐朽速度の速い木造住宅の故に高率な、時には高利貸的な家賃を生じる程の冒險性をもつた企業であることが特徴的であり、従つて純然たる營利事業と云ふよりは、副業的な又寄生的な經營とも謂ふべきものであつたが、今やインフレによる建設費の飛躍的な嵩高と金融關係からの冷視と、何よりも大衆の貧困の爲に崩壊の過程を余儀なくさせられてゐる。統制を解除して自由建築とすることは、この崩壊過程を更に徹底さし、戦争の責任者たる國家に、國民住宅を建設する重大責任を解除することを意味する。

以上は、半世紀以上に亘つてのバラック式低劣住宅建設、日本の住宅を一様にスラムの段階迄おし下げる復興方式の第一の主要因とすれば、第二の要因は住宅を求める國民大衆の余りにも人まかせ的な、與へられたものに對する順應のみを事とする態度の中に求められなくてはならぬ。壕生活者は謂はすもがな、六帖一室の間借りが權利金一萬圓で室代七〇〇圓、そこに五人も六人もの家族が生活せねばならぬ最低生活、通勤距離の隔大により齎られる疲労、同居人による生活の攪乱、總じてかゝる状況から明朗活潑な氣力は生ずるものではない。子女はこのような住居には寄りつかず、惡の華に誘惑される。國民の衛生は惡化する。その他犯罪と墮落の溫床として、祖國再建の由々しい障壁とならうとしてゐる。だが未だに全國民的な組織された住宅要求の聲は極めて微力であり、散發的である。新憲法第二十五條のすべての國民は健康で文化的な最低限度の生活を営む權利は又國民の不斷の努力に依つて保持されねばならぬに拘らず、私の寡聞に僅に建築學會の『住宅對策要綱』中の住宅委員會の設置對策しか知らぬ。而も之とて實踐の中に解決されて行く問題ではなくて、學者諸氏の机上論に過ぎぬことを想へ

ば、何らの對策なしと云へる。さきの討論に於て私は提出した五ヶ條の問題の一つ『住宅難は何故從來解決しなかつたか』といふ結論に於て『住宅に悩む市民大衆の闘争組織ができてゐなかつたといふこと、現にそれが活潑に動いてゐないということ』を指摘したのであるが、その原因は、住宅が食糧や榮養問題の如き單的な要求として現れる代りに相當な弾力性を有ち、一日二日を争はず常にのびのびに放置され得る性質にもよることは勿論であるが、それにも増して永年官僚的封建的な政治支配下の奴隸的生活に順致され來つた大衆の、自己の權利に對する無自覺と従つて又それだけ住宅を求める組織化活動の困難とにあることを重ねて強調せざるを得ない。

これが、『これからの住宅』の前提條件のアウトラインである。この余りにもミゼラブルな現狀に未來の夢をうちひしいではならぬ。何故かなれば、かゝる惡條件の中にこそ未來にのびる發展の芽は同時に成長しつつあるから。即ち第一の要因の中には個人的貸家經營の没落と同時に國家による住宅の公營企業化の強行。第二の要因の中には國民大衆の住居への組織化。これら二つのものゝ具體的集約的表現として集團化住宅が新しい時代の新しい課題として登場する。集團化住宅に關しても私は參議院の討論に於て簡單ながら述べておいたが、これこそ今日の住宅からより高次な明日の住宅への橋渡しをするものであり、これなくしては『これからの住宅』の夢も畫け得ないであらう。

3

急いで夢を畫かないようにしよう。こゝでは更に今日の住宅生産について若干の確認をしておかう。

一、今日の日本の住宅生産は依然として大工、左官の手による手工業的指物師的方法で生産されてゐること。従つて新しい形態の創造に對しては極めて保守的であり、ただ継手と仕口の手法に對する猛烈な聽人的習練がつづく。木造建物自体の持つ規格化傾向にかゝわらず、それを發展させて新しい生産様式の規準を打建てることもなく、却つて建物の骨格部分と仕上げ部分が共通の役割りを果たために技術の極度の集約化が要求されて、

それに没頭することにより、單純な工具の改良、發明すら爲し得なかつたこと。之は小規模現場生産に適應する。

二、技術のこのような集約性と複雑性は親方、徒弟制度によつて愈々保證される。住宅建築の持つ小規模、零細經營性はかゝる小グループの排多的、セクト的、前資本主義的性格を強化する。やがて日本の全建築企業の形態が親方制度によつて一貫され、仕事の受授は請負制に依りとり行はれて、近代西歐建築の輸入とともに若干の機械が導入されるにも拘らず、近代工場生産化の方向をとらずに根強い封建制を特徴とする。この関係を裏付けるものは日本農村の潜在的過剰人口群と勤勞階級の所謂低賃銀制度である。

三、組立構法、乾構築は、第一次世界大戰後の住宅難とともにいち早く歐洲に於ては代用資材による建築の研究の結果として唱導され始め、材料の規格化、建物の類型化、流れ作業、乾式構築等が提唱され、それらが一つの建築思想にまで發展し、獨逸にあつては所謂社會民主主義政府下のジードルング事業として實驗的、試作的に各地に實施され、建築の工場、生産の展望がなされるのであるが、日本に於ては進歩的建築家による建築の科學化運動の中の一環として捉えられただけで、偶々二三の住宅に乾式構造が行はれてもそれは單なる好事家的、流行的性質の域を出るものではなかつた。これは第一には住宅の量産の必要性がたとへあつても、個々の土地に、個別的資本により建築されて満足する傾向の方が強く、第二には請負産業の驅使する勞働力の低賃銀のために、こゝでも機械化が阻れて了つたこと、第三には技術自体の未熟と不完全性（終戰期近くに試みた住宅學團のパネル式組立家屋）そのために新しい科學技術のよき意圖が國民のものとなり得なかつたこと等が主なる原因としてあげられる。従つて組立構法については日本ではなく先進諸外國に於て發展しつつあつたと云へる。特にソ連に於けるモスクワ市の改造、ストックホルム市の市營勞務者住宅、アメリカのテネッシー河開發計畫に於ける住宅の量産、等に於ては實用性と經濟性を確立させてゐる。

四、今日に於ける日本の組立工場生産住宅につ

いてはどうであるか。敗戰後早くも住宅の量的建設に着目して民間の木製飛行機、造船、紡績、木工等その業者によつて工場生産住宅協會が発足したことは周知の通りである。第一次世界大戰は人類にラヂオを齎したとすれば、今次大戰は工場生産住宅を與へたとは、同協會から G・H・Q への提出の工場生産住宅の現状説明の序文にある言葉であるが、住宅生産の産業革命とも云はるべきこの工法は、恰も戰爭による世界の住宅の大量不足を前提として、その解決策として生れたようなものである。日本の今日の技術的水準、機械化（特に搬送設備）の程度は到底アメリカの夫れとは比較にならぬとしても、かゝる協會の誕生は手仕事を機械によつて置き換え、作業能率を、天候その他種々の制約をうける現場手仕事の二十～三十倍に高める。從來の工法によれば普通住宅は三ヶ月で完成する時に、工場生産業者は工場加工を含めて少くとも十日に一戸は完成する。三ヶ月に九戸、比率で云へば手仕事生産に對して一對九の進行速度を持ち、協會の現有のみの月産能力は十二坪住宅で三千戸、日本全体の工場生産を見積れば月産五千戸、年産六萬戸。これは膨大な數量ではない。それにも拘らず昨今、工場生産住宅協會は事業不振におち入り、二三の業者は既に工場を閉鎖の止むなきに至つたときいてゐる。この原因は何か。第一に恒常的注文のないこと、土地取得とからんで集團化住宅の建設が行はれないこと、第二は新建築材料の不足、市場の不安定から生ずる生産の冒險性のため、技術の負困が生ずる等々あるが、就中主要なるものは從來の封建的請負生産のもつ低賃銀による價格の弾力性に對抗し得ない点である。入札制度は近代的生産と封建的生産と質的差違を見得ない。更に他の一つは建設行政機構及び擔當者の措置が、本工法の革命的意義を未だに認識し得ないことで、これは資材割當、切符制等に関して從來業者と同様の取扱ひに現はれてゐる。この様な工法をもつ組織に對しては國家は育成を計らねばならない時に、放置して從來の封建的な生産方法の荒波の中に没せしめることは、矢張り住宅問題に對する政府の根本的には白痴的見解の表白であらう。

以上で住宅生産のあり方について概観したのであるが、尙一言つけ加へるならば現在の日本の工場生産住宅の力は非常に弱いことである。今日復興住宅は年産四十萬戸、工場生産住宅は年産六萬戸、これは五・六對一の力關係を示す。五・六は依然として大工の手仕事によつて遂行されねばならぬ。彼らは機械を興へられてもそれを受入れようとはしない。かくて機械の採用による建築産業の封建性の打破は仲々困難となつてくる。これは組立家屋が手仕事よりも遂に廉價で生産されるならば、次第に機械化も行はれるが、今日の處さしめる廉價も望み得ない（大体に於て從來工法に比較して勞務費は現段階に於て三〜四%安、諸經費一%高で差引き二〜三%安となる）ときには依然として機械と張合つて手仕事がつづくであらう。それ故に建築生産の封建性を打破して、一層の住宅生産を全面的に昂揚さすためには、極力工場生産の低廉化を押し進める一方、働く人々の低賃銀水準を高めること即ち憲法に保證された人民の最低文化生活維持の水準まで高める闘争が行はねばならぬ。このために特におくれてゐる建築産業における労働組合の組織と其經濟闘争は、やがては建築産業の正當な機械化を促し、住宅生産が一層能率よく高まるといふことを忘れてはならぬ。

5

十二坪のスラムの再生産の如き個別分散的な今日の住宅復興は、それが如何に應急對策の名のもとにカムフラージされようと一つの惡盾環に過ぎぬことは前節で見た。資金、資材の絶對量の不足が、かゝる一人當り二坪半といふ住居面積を余儀なくせしむる處に、生活文化水準の向上はあり得ず却つて社會惡の根源を培養するに過ぎぬ。それ故に、その技術的な解決方法として集團化住宅が生れ出さねばならぬのである。それは單なる個別住宅の集合体ではなくて、住宅のもつ機能を分析して、その中の可なりの部分を極力社會化することによつて、十二坪の中に營まれる生活内容を豊富化しようとするものである。勿論住宅の理想形式がこのような社會化の中にあるとのみは云へないが、今日の段階にあつてかゝる理想を主張することは、結局は何もしないことを意味し、スラム化傾向を却つて助長させる結果となるだけで

ある。

集團化住宅の根本思想は生活の共同化である。之によつて低文化水準化傾向から自己を防衛し、從來の私的消費生活を極度に合理化し、各種の施設を最大限に社會化しようとするものである。嘗て戰時中生活の共同化は家事勞働力の不足と資材施設の不足を補充するために天下り式な戰爭遂行の要請としてとりあげられた。特に農村住宅に於ける共同耕作、共同炊事、託兒所等の出現は封建的家父長的關係の打破と施設の改善では若干のプラスもあつたが、問題はこれら共同化は一切を舉げて戰爭遂行の目的に指向されたことにあつて、それに依つて獲られた剩餘時間は、生活文化の充實へではなくて尙且つ家庭經濟を支へるための副業的勞働又は『挺身隊』的な奉仕勞働へと捧げられざるを得なかつた。さうではなくして今度こそ戰爭放棄を宣言した國民が主權となつて打建てる國家にあつては、共同化も亦民主的な力の結集と組織により、國民の創意の下に明るい豊かな科學技術に立脚した生活建設の創造といふ目的に指向されねばならぬ。共同化によつて家事勞働が眞にその緊縛から離れ、殊に婦人解放の前提的物質條件が作り出されねばならぬ。

建設さるべき集團化住宅は、先づ社會化し共同化しうる諸施設の検討から始まる。それは集團の構成員の家族構成、職業、性、年齢等及び客觀的周邊條件によつて異つてくるであらうが、大体に於て共同炊事、共同浴場、共同洗濯場、託兒及保育所、消費組合又は配給所、集會所又は慰樂的クラブ施設圖書館、等が中心施設となつて、それを取り巻く住宅集團の計畫的配置によつて構成される。戰前大都市に於ける公衆浴場數は二千人當り一個所、戸數當りにして三百戸に對して一ヶ所と謂はれてゐるが、一單位集團を大体三百〜四百戸に定めるのが尤も妥當であらう。共同施設と單位集團との關係は、あるものによつては單位集團の二、三が集つて一つの施設を持つ場合もある。初級學校の如きは西山氏によれば一千二百戸〜一千五百戸に一個所と謂はれてゐるが、さうすれば四ヶの單位集團が一校を持つといふことになる。このような細部的な技術的な問題は尙夫々の専門家の活動にまつとして、このような方向への組織活

動が、國民の住宅を求める人々の中に押しひろげられなければならぬ。集團化住宅の前驅的條件として人民の民主的組織が同時に住宅獲得の組織ともなり得る。

6

次にその建設の方法であるが、これは工場生産によつて合理的に計畫配置され得る。集團化することによつて建設費は確に今日より低廉化し得る。而も資材源地と生産工場との合理的計畫的配分は、搬送費の價格を低下さすであらうし、量産化が百%の稼働力を發揮したときに得られる諸経費の低下、更に附帯設備たる水道、電気、瓦斯、その他整地費の集約化による利益等々を考慮するとき、現在の個別的に建てられてゐる住宅に比して採算上から云つても有利となるに違ひない。そしてこの経費は當然全額國庫負擔であることは云ふまでもない。

『これからの住宅』を畫くとき、直ちに縁にかこまれた高層住宅の繪を想ひ出す。又不燃性材料による堅固な住宅を慾する。だがそれは今の日本の段階で直に實現し得ないものであるならば、この貧しい資材と生産力を以つて如何にしてその理想の方向へ住宅を押し進めるかを考へねばならぬ。集團化住宅が今日の住宅現状を打開する第一歩の進歩的段階だとするならば、この方向の中に將來の住宅の理想も亦内在してゐる筈である。それは(一)人民による民主的組織による生活の共同化、(二)住宅諸施設の社會化、(三)それによる家事労働の軽減特に婦人解放の物的條件の創出。(四)生活文化の上昇により齎される労働意欲の増大とそれに伴ふ生産力の高揚等であらう。これらのものは、まさに『これからの住宅』の居住形式を決定する基礎條件を形づくる。住に關する幾多の問題、例へば椅子式生活か坐式生活か、暖房をどう

するか、就寝様式、一人當り部屋の必要面積、間仕切り方法等々の問題は『これからの住宅』の課題として残されてゐるが、それらは上記の四つの基礎條件を充すことによつて自然と除々に又急速に解決されて行くであらう。我々は生的條件の成熟しないときに、かゝる課題について語らうとすれば、勢ひ抽象的結論か空想的設定に終らざるを得ないことを知つてゐる。理想をかゝげる前に、その基礎を確立しよう。それが今日の日本の當面してゐる住宅難の解決法である。

7

祖國日本の再建と復興の二つの路。一つは國民の餓死を抵當として、依然たる低賃銀と少數労働者による勤勉な植民地的な長時間労働を基礎として、資本家には生産意欲を持たせるための自由な資本の蓄積を許し、かくして外資導入を中心にその經濟再建をはかるコース。一つは働く國民の安定した生活と低劣な労働條件の廢止の上に、一部資本家やヤミ利得者のためにではなくて全國民のために、全ての休止状態にある生産機關を稼働せしめ、荒敗した國土と固定施設を回復し、それが全國民の民主的要求のまゝに運轉されねばならぬコース。この爲には科學、技術に立脚した民主的な政治が行はれねばならぬ。住宅復興も正に、かゝる二つの再建=ユースの何れかを撰ぶべき段階にある、端的に云つて一つは半世紀以上を要する手工業的住宅生産復興方式、一つは近代的工場生産と科學技術を充分にとり入れた方式、そしてこの選擇は一にかゝつて住宅を求めつゝある國民の實踐行動の主體性にある。こゝにも亦、住宅を巡つて餓死か斗争かのきびしい法則以外には、『これからの住宅』の美しい夢と楽しい生活を建設する路はないことを銘記せねばならぬ。

(1948.3.10)



東 洋 木 材 株 式 會 社 土 建 部

本 店 大阪市南區心齋橋筋一丁目一八番屋敷(大丸六階)
電話南 2347-2349・2356-2359・2374-2376

吉野支店	奈良縣	吉野郡	大淀町	北宮	田	2	8	1
新宮支店	新和	宮市	新	宮		4		8
和歌山支店	歌山	市	美園	町	5	丁	目	5
東京出張所	京	都	丸ノ内	ビル				3
徳島出張所	徳島	市	幸町	3	丁	目	2	0
京都出張所	京都市	中京區	西ノ京	池ノ内	町			18



古民家隨筆

藤原義一

昨年静岡市外の登呂で發掘された古代の遺跡は、日本住宅史或は建築技術史の上に種々貴重な參考資料を提供した。少くとも千數百年、ことによると二千年も以前になるかも知れない頃、のこぎりもかんなもなく、それでも何か鉄製の工具を使用したことが、木片の工作の痕に示され、竹のように細く割つた木を骨子として圓い平面に周壁を造り、内部に柱を四本立て、その中央に爐を切つてゐたことが知られる。我が國の原始家屋と想像される天地根元宮造と呼ばれる様式の平面を圓くしたようなものであつたらしい。水田農耕を営んだ集團部落で、同じような跡がいくつも並んでゐるのが見出された。

① 圖



その後佛寺建築が大陸から渡來して、壯麗な伽藍建築が發達したが、一般民家は殆ど影響をうけず、極めて簡単な原始家屋の域を脱せず、奈良に大規模な都の造營されるまでは宮殿でさへ茅葺板葺の状態をつづけてゐた。

萬葉にある山上憶良の歌詞に伏いほのまげいほのうちに、ひた土にわら解きしきて、父母は枕の方に妻子どもはあとの方に、圍み居て憂ひさまよい、かまどには火氣ふき立てす……

とうたつてゐるのは奈良の盛時の華やかな建築文化の黄金時代の反面にあつたあはれな人達の住居のさまではあつたが、併し一般の民家はこの状態を大して出たものではなかつた。

古い時代の地方民家をあらはしたものは家形埴輪や銅器の模様などで若干知られるが、普通の繪畫として描かれたものはあまりない。奈良時代ではわずかに正倉院御物の麻布山水屏風①圖に極めて簡単な草葺家屋が描かれてゐるが單純な切妻か入母屋風の百姓家の納屋のようなもので、それでも柴の垣をめぐらし自然木で簡単な鳥居形の門を設け、多少庭園らしい木石流水の配置もあつて、當時においてはこれでも相當な家であつたことが想像される。

平安時代になつて佛寺建築は奈良時代とはまた

② 圖



信貴山縁起 長寿の家勝手の様子

別の性格をもつて発展して行つたが、民家殊に農山漁村などの住宅には大した進展は見られず、唯だ中期をすぎると京都の寝殿造邸宅に對して地方豪族の邸館などには相當に整備した茅葺や板屋根の家らしい家が出來て來たようである。併しこの間には徴すべき資料が甚だ少くて、具體的にそれを指し示すべきものは殆ど遺されてゐない。

平安時代末葉になると信貴山縁起②圖や伴大納言繪卷が現はれて來て、その住宅の狀態が既に鎌倉期に入つて見られる程度に近づいてゐることが示されてゐる尤もこの二つの繪卷は或は鎌倉に入つて描かれたものではないかとの疑ひもあるが、様式的には平安に屬すべきものと見方が有力であり、建築的細部手法よりしてもこれは承認されるので、平安末の建築を知る上に有力な參考資料としてよい。併しこゝにも農山漁村の一般民家については二三民家の簡単な屋根を描く程度で、殆ど手がかりになるものは描かれてゐない。

信貴山縁起には創建當初の東大寺大佛殿が描かれてゐるので有名であるが、若しこれが平安時代の筆に成つたとすれば大佛殿の研究に非常に重大な資料價值を持つ意味で我々の注目してゐるところである。それは創建の東大寺伽藍が平安極末の治承四年に焼失したので、これが焼失以前のものか以後に描かれたものかということが大きな問題となるからである。

それはそれとして、この繪卷に描かれてゐるものに長者の家というのがある。長者の家であるから一般の農民や漁夫の家とは多少意味はちがうが、その家は方柱に大面が取つてあり、長押を打ち六葉の飾金具も打たれ、都を吊り、壁は柱と柱との間に横板を嵌め込んでゐる。即ちその構造形態は鎌倉全期を通じて見られる比較的上流の邸宅武家や僧侶の住宅に於けるものと殆ど異るところはない。この家の勝手で一人の女が台所仕事をしてゐる場面があり、そこには腹の高さ位のところに流しが設けられ、鉢を手にして何か水仕事をしてゐる。流しの外方は一尺五寸か二尺ばかり出窓式に水屋の掛け出しとなり、板廂を造り、そこに曲物の桶や鉢や茶碗のようなものが置かれ、一方にはまた三段造りの置棚が備へられ、浅い木箱のような器に瓜か梨のようなものが盛られ、鉢を重ねたり風呂敷包みか袋のようなものも置かれてゐる。

水屋の掛け出しは側板が鏝戸式に張られてゐるのも興味をひく。又流しの方には爐が切つてあり、都の内には幕が掛けてある。爐は他の部屋にもあつて、それは長方形の枠の中に圓い火鉢が造られてゐて、そこに炭火のようなものが燃えてゐる。このような勝手の置棚や爐の狀態は鎌倉期の繪卷物などにはしばしば見る光景である。

この家の門は二本の角柱を立て、上方に貫を通しくさびを打つてゐる。この時代によく見る形の門で、これを圓い柱や自然木を以てしたものもしばしばある。

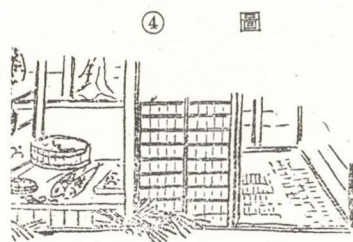
③ 圖



民家として信貴山縁起に描かれてゐるものを一つ挙げると、それは草葺きの入母屋形の下に板葺の廂をめぐらしたもので、棟には幅の広い大きな瓦のようなものが伏せてあり、軒には相当疎い間隔にたるきの先が見え、柱は方柱に長押が打たれ入口に横まいらの障子が立てられてゐる。草あじろ編みの塀があり、丸太二本を立て、門を造り、門の内の板塀に接して八瀬の釜風呂を連想するような大きなかまどが築かれ、釜が掛つて火が燃えてゐる。板屋根に太竹の柱、傍らに薪の束が何かのようなものが積まれてゐる。民家は民家でも普通の百姓家ではなく、相當の大家と思はれる。

又板屋根に前後兩廂をかけた家があり、妻の二枚の土壁に四角な下地窓が一つづゝ二つ並んで設けられ、四角な柱に四角な梁と桁をのせた單純な構造は、當時の民家構造の一般様式を示すものとして参考になる。

鎌倉末期になると繪卷物などの資料がにわかに多くなり、住宅の様々な状態が描かれてくるが、多くは上流の邸宅か武家や僧侶の住居で一般民家は依然として少い。併し地方豪族などの住宅で、草葺屋根に板廂の、地方色豊かに而も邸宅として形態設備の整つたものが往々見られる。そしてこの頃から魚や青物やわらじなどを賣る商家がしばしば現はれてくる。



④ 直幹申文繪卷の商店

直幹申文繪卷③圖に描かれてゐる一例を説明すると、板屋根入母屋造の妻を表に見せた家は、間口二間の中央柱の一方に、床の高さより少し高いくらいの所に、横板を一枚道路の方へつき出して、前に細い脚を二本立て、そこに鰹か鯖か鰯のような魚を何種類か並

べ、はまぐりか或は鶏卵かと思はれるようなものを錢箱に入れて置き、その上方、柱から柱へ適當な間隔に竹のような細い横棒をわたし、下の棒にわらじや紙のようなものを下げ、上の棒に數本づつ並べて紐で吊した鰹節のようなものを下げてゐる。

中央柱から片方は土間となり、その土間には板が張られてゐる。壁は横板を嵌め、板の間には押ぶちが縦に打たれてある。板屋根は縦板に横の押木を打ち、所々に石のようなものがのせられてゐる。

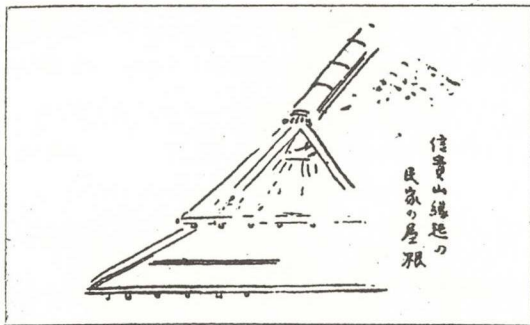
この家から左へ直角に折れて別の店があり、その境には網代戸のような戸が開かれ、店は間口凡そ一間か一間半と思はれ、その三疊敷くらいの間に大きな魚が二尾並べられ、そのあたりに圓いくらいの大きな桶や、浅い四角な箱に何か入れて置かれ、またこまごまとした品が並べられてゐる。

この部屋の左の奥にも一部屋が見えて、部屋一面に瓜かかぼちやかのようなものが並び、兩部屋の境には前の家にあるように竹のような横棒を二本取りつけて、わらじか澤山吊されてゐる。魚を並べた部屋の奥に窓のようなものが見えてゐて、そこには幕が下げられてゐる。表部屋の右に一間の入口があり横棧のまいら戸が二枚立てられその右の一間は土間で、藁が一面にひろげられ何か干してある、店の間の道路に面する床下の小壁は縦板張りとし、そのあたりの地面に藁束が二束三束とかためて置かれてゐる。

一々例を挙げることは省くが、このような店の構へや品物陳列の状態は同じ頃の繪卷物には續々見るところであり、又これ以後の時代、江戸時代に至るまで屢々描かれ、現在でも田舎の小さな町家にも見ることが出来る。

ひるがへつて田舎の農家や山家などに就て考へるに、例へば一邊上人繪傳などに描かれてゐるそ

⑤ 圖

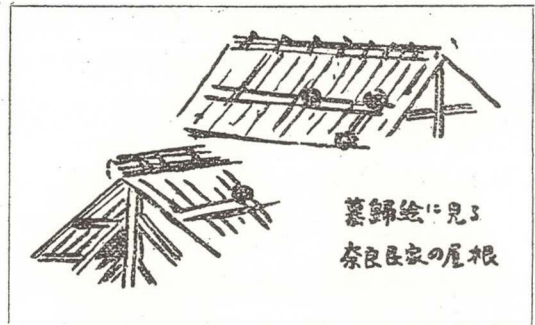


れ等の民家は、主に信州路方面の田舎家であるが極めて単純で、サイコロに屋根を着せたような程度で、奈良時代平安時代に想像せられるところのものとあまり差が認められない。一部有力者の住宅を除けば農山村の民家は鎌倉時代には尚ほ極めて単純で、町家の発達より一步遅れてゐたことが認められる。このことは町の生活、商家の營業が時代と共に発達するテンポが農山村のそれより速いことを意味し、又住宅再建改造の度合も多く建築技術進歩の影響を受け易いことをも物語るものである。

そして農山村住宅の相當に形態を整へてくるのは鎌倉末葉頃から室町初期へかけての頃であり、以後は比較的順調に発達を遂げて、桃山から江戸時代初期に至り遂に現在の農山村民家の基本形を完成するに至つたのである。このことの證明はもはや繪巻物の力を借るまでもなく、現在各地方に遺る實物によつて明かに知ることが出来る。

繪巻物に描かれた建築が、その描かれた時代の特色を示すことは、不思議なほど正確であつて、その建築の全體の形態は勿論、部分部分の手法様式、例へば鬼瓦からげぎよの形、裏股や木鼻、唐破風、格狭間、花頭窓、長押に打たれた六葉金具の小さなものに至るまで、鎌倉時代は鎌倉時代、江戸時代は江戸時代と、必ずその描かれた時代の實際建築に於けるそれ等の特色がそのまゝに示されるのが常である。畫家は必ずしも建築家とは限

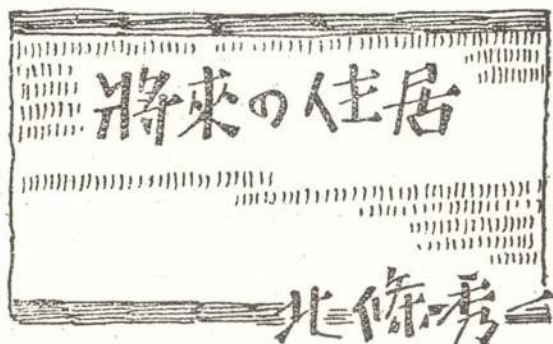
⑥ 圖



らない筈であるのに、その時代の建築家、工藝家彫刻家が直接筆をとつたのと同じ結果が現はれる。この故に繪巻物の建物は建築家が筆をとつたのだと稱へる人もある位である。

鎌倉時代の繪巻物を江戸時代に模寫したとき、原本では部屋が板敷であるのに、模本ではすっかり畳敷きになつてゐることがある。鎌倉時代の邸宅では相當上流でも部屋の多くは板敷きのまゝで一部分に畳を敷くのが普通であつたのが、江戸時代になると畳敷きが普遍化して、一般の住宅でも部屋全體に畳を敷くようになる。その結果生じた現象である。

箇々の家屋に就てのみではなく、都市全體に於てもこんな現象は同様で、例へば京都の市中を描いた洛中洛外繪圖や山鉾巡行の祇園會圖に於て、室町時代に描かれたものは、市街の家々は板葺きに石を置いた單純な屋根ばかりで、寺院などを除いては瓦葺は殆どなく、土藏造や塗込式の家も勿論ない。桃山時代になると家の形が急に立派さを加へ、瓦葺白壁塗廻しの土藏式や煙出櫓や、表通りの外廻りを壁で塗り込んだ防火家屋が急に増えてくる。江戸時代になると此の傾向が一層進んでやがて棧瓦葺の町家が現はれはじめるのである。それ等の繪圖を年代順に並べて見ると、それはそのまゝで京都市街建築の成長發達を示す連續寫眞か、記録映畫である。



敗戦後滿一ヶ年を奉天に亡國民の辛酸に満ちた生活を體驗して、昭和二十一年八月末、私は日本に歸つた。

戦争をしなければ日本は敗戦の悲境に落ち込まないで済んだことは勿論であるが、それは全く非現實であつて、實際に日本は敗れるべくして敗戦したのである。敗戦の原因は色々と考えられるかも知れないが、私は日本民族に世界觀がなかつたこと、この三、四十年全く怠惰であつた結果であると思ふ。

従つて敗けない日本、戦はざる日本を建設するためには、何よりも日本民族が廣い高い世界觀を持ち勤勉であることが絶対に必要なのである。それは日本民族の文化の向上によつて實現されることではあるが、私はもつと手近かなところから日本人の島國根性を直さなければならぬと思ふ。

滿州から日本に歸る途中、何よりも先きに私が母國に求めたものは住居問題であつた。私の家は私が五代目の大工棟領である筈なのが私は大工にさせられなかつたのである。けれど私の素志は學校を出て滿州に行く迄建築家にならうといふことであつた。渡滿後私はこの志を放棄したのであつた。私の求めた住居問題とは、住宅難の問題でなしに、日本家屋の改造のことである。

日本人の將來の住居の改善について私の考へてゐるところは二つあるのである。

第一の改善の點は、家屋の規模を、今の五尺八寸を六尺にすると云ふことである。疊も建具も實寸を六尺と三尺とするのである。

第二は宅地と建物の比率を一定すると共に宅地の所謂一筆の最小限を決めることである。これは

都市の住居について特に必要である。現在一定の規準があつても全く實行されてゐないし、又規準があつても、宅地の大きさに規準がないために、現状の様な九尺二間は愚か三尺一間のマツチ箱の家が立ち並ぶのである。何うしても都市では宅地一筆の最少限を四、五十坪に決めるがよいと思ふ。

住居のことについて色々研究や希望があるとしても、それを民族的な規模に於て改良實現することは容易でない。疊、便所、炊事場、採光の諸問題殆んど限りなくあるであらうが、それを實現することは容易なことでない。従つて將來の住居の設計をしたところで空中夢に等しい結果になる。こうした考への現實感から、私は日本人の將來の住居について、上述の二つの條件を全國的に實行するだけで一應満足しなければならないと信じてゐるのである。人間の行動半径と云ふものは全國民としての平均はそう大きいものではない。従つて日本人が島國に住んでゐると云ふことによつて、必ずしも島國根性が養はれるのではないと思ふ。日本人を島國根性に閉じ込めてゐる最も大きな原因は住居だと思ふ。だから島國根性から日本人を解放するための最も現實的な方法は、住居をこの二つの點で改造することであると思ふ。

昔の大名屋敷の様に襖も疊も縁も玄關もが大きな規模で作られるならば、日本人の膽玉はずつと大きくなると思ふ。大名の作つた家屋のように襖や衝立や玄關を擴大することは容易でない。そこで現在の五尺八寸を二寸擴大して六尺にでもすれば、日本人は現在より何倍かの心の廣さと朗らかさを増すに違ひないと私は思つてゐる。

私が國會議員として國土計畫委員を第一に志望したのは、強ち住居のためではないが、日本を作り直すために、先づ手近なところに住居の改善と云ふことがある。そしてこのために日本中の大工を教育し直す必要があり、大工に家屋の寸法の新しいものを習得せしめなくてはならない。

たつた二寸の違いで用材量は可成り増加することも考へられるけれども、日本民族自體の再建設のためには極めて安易なる犠牲であると思ふのである。

住宅難列車

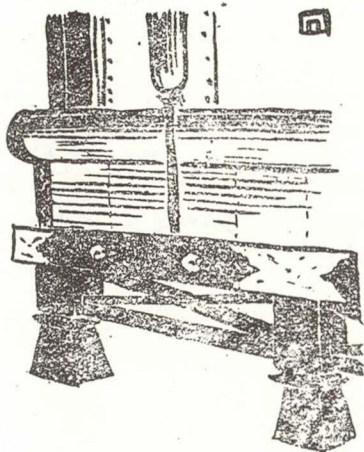
ニシヤマ ウゾウ



株式會社 盛 工 務 店

代表取締役 盛 道 雄

營 業 所 大 阪 市 北 區 地 下 町 一 五 番 地
電 話 堀 川 ㊟一四二九・二八九三番
支 店 神 戶 市 荻 合 區 熊 內 橋 通 二 丁 目 二 六 番 地



舊K宮邸見學記

鞍馬寒平

1

季刊『建築と社会』の第1号に住宅特輯號を出すについて、宮様の住宅の見學記を是非ものしてくれと編輯部の方から協會の京都支部にたのみこまれた。新憲法によつて皇族がなくなつたが、今まで常人のうかがいしることのできなかつた宮様の住宅を、この機會にタンボーしてはどうかということになり、それに縁の深かろう京都にもちこまれたわけである。役員會の席上、O氏がK宮邸ならなんとか都合がつくとのことで、見學のメンバーをきめて日時をうちあわせた。

さてその日になつてみると、カンジンのO氏は來ない。そのほかにも一人缺席あり、結局H氏を1人エキストラに動員してH組のダツトサンにのつて同勢4人でりつけた。府立病院の一つ南の河原町の辻にK洋裁研究所という名ふだがでゝいる。その辻を入つて大きく開かれた門の前に車をおりる。砂利をしきつめた門内の正面に木立ちがあつて、それが車まわしになつてゐる。そのうしろに玄關がある。むくりやねの棟の正面に同じむくりやねの車寄せが出つぱつてゐる。人氣のない様子。

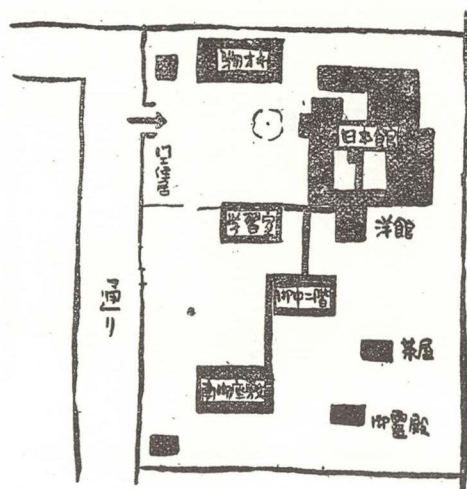
横の洋裁研究所とかいたヘイの方へまわる。＝

ワになつていて、そこまで入りこむと南向きの二階建があつて、下はどうやら見學の目的の一つだつた洋裁研究所らしく、若い娘さんが10人ほどミシンをかけたり、カタを切つたりしている。あやしげな4人づれに向うでもきづいたらしく、U氏が縁側にちかすくと、奥の方から先生らしい婦人が應對にでゝこれこれとおしえてくれる。

結局逆もどりをする。砂利しきの前庭には白いペンキぬりの立喰小屋が二つチョコナンと並べておいてある。その昔この中に請願巡査(?)がたつていてわれわれ如きものゝ入門をするどくとかめたのだろうが、今はわびしく片づけてある。玄關北側の入こみを入ると玄關わきのヘヤが事務所になつていて、その入口が丁度その側面に開いてゐた。

來意をつげると乃木大將のようなクビのシヤンとしている老人が出て來て上れという。

クツをぬいで事務所に上る。すゝめられてコシをおろしたわれわれ新米4人のタンボー記者(?)に『何をみようとするのですか』——と短刀直入の質問、急にこたえが出なかつたが、前おきのようなことをしやべると、この家はもと滋賀縣知事江大介氏の宅で、それをK宮がゆづりうけられたものであるとの話……に、たちまち豫備調査不



鴨川
川

充分の失敗を気づいた。

2

屋敷は宮内省所屬地1571坪、それに東の方に奥行數間は鴨川の河川敷になつていて、合計2040坪北の方が舊中江邸で平家建日本館（御殿）194.6坪とこれにくつした土蔵洋館二階建43.8坪がありこれが表向きの部分、これに廊下で南の部分がつながる。こゝから南がもと油小路郷の邸宅のあとで、御中二階42坪、南御殿76.1坪がずっと南にのびる廊下でつらなり、丁度その境のところに西の方へいま洋裁學校につかつていいる2階建學習室83.1坪がある。

これらの建物のうち、北の表向き御殿は財産税として大藏省に物納されることになつており、南の部分のみが現在すまいにつかわれている。われわれ一行はその北の表向き——中江氏の建築をみせてもらったのであつた。

此の部分の平面構成は第2圖の如く西側に玄関内玄関、使者の間など一連の玄関部分が南北に一棟をなし、玄関から真すぐ東へ5尺巾のタタミ廊下（ジュータンじき）が走り、奥の方四ツ目の書院風の主屋に通ずる、その途中に8帖の應接室が

ある。主屋は東向きに南北14帖、10帖の大室があり、そのウラ側、中ニワぞいの高マドのある縁側に接して4帖半27、表4帖1つがならび、來客はこの廊下をつたつて10帖の方へ出る。10帖は入口近くに床の間があつて、うつかりすると來客が上座にすわるうれいがあるとのこと。この10帖のつくりは無論和風だが、イス式でテーブルを真中に脚のまがつたイスが6脚ほどおいてある。天井の特有の照明器具とともにいかにも『宮邸』らしい形である。

オクの部分は中央廊下から北の方にのべた部分で廊下の兩側に室がならぶ、内ニワ側は召使いのへやらしい、この棟がさらに西へおれて、その最尖端に大きな台所がついている。

3

内玄関はこの台所と玄関わきの事務所につかつてるへやのも一つ東隣のへやとの中間にヤネがつくつてあつて兩方に入るようになつていいる。婦人客などはこゝから北の部分へ直接入つたという。

玄関棟の南はしと主屋とをむすぶ位置に、かべ厚1尺あまりの土蔵づくりの洋館があり、二階建てで小さなマドが四方にあいていいる。下は鐵格子がはまつていて、二階にも鐵扉がついていいる。また地下室もあり、地下室には内坪にドライエリアの様なところから入る。地下は倉庫だが上の方はすべて居室につくられ、中江氏はこゝにすまつていたという。當時の殺伐な狀勢、縣知事ともなれば如何なることを考えてくらさねばならなかつたか——建設當時の世情がさこそとしのばれる。建ものゝ外まわりの建具にはすべて桎が細かいサンなどの中に巧妙にしこまれていて、警戒嚴重をきわめるのも、これと一脈通ずる。

この土蔵づくりは夏はすすしいのではなからうかと思うが、果して住み心地はどうであつたら

う。カベつき暖爐もつくつてあるが、K家ではこれをすまいには全然使用してなかつたという。二階のヘヤは春向きの應接室らしく、南正面のカベ暖爐はフスマでかくし仕込みになつてい、その上にかゝげた大きなカガミのカマチに入っている金の菊の紋章と東西のまどの上についている黒うるしのとヒブサのステレなどは、なるほどこの家にすむ人の素性を明にしている。

4

立派なすまい——しかしこれが税金として物納されてどうということになるのだろう。

住宅のないとき、余裕住宅として開放するがいゝ——という考えは住宅難の實情とその解決の量的面を眞剣に考えるものにとつてすぐ考えつくことだ。しかしこれを余裕住宅として適當に區切つて住まわせたらどんなことになるだろう。『ブタに眞珠』などというアイサツは人民を愚弄するもので問題にならぬが、しかし何か一つセンスのかけたやり方だという気がする。建築の内容は『床面積』ではかられるものばかりではない。本當にこれをうまく利用しようとするれば、しかく簡単に『開放』とはでてこないからだ。

といつて、では何に利用するか——というと、見學者一同の意見は旅館か料理屋がいゝという。そうすれば建物の保存がよくなり、總ヒノキづくりの立派な建物にみがきがかゝつてくる。

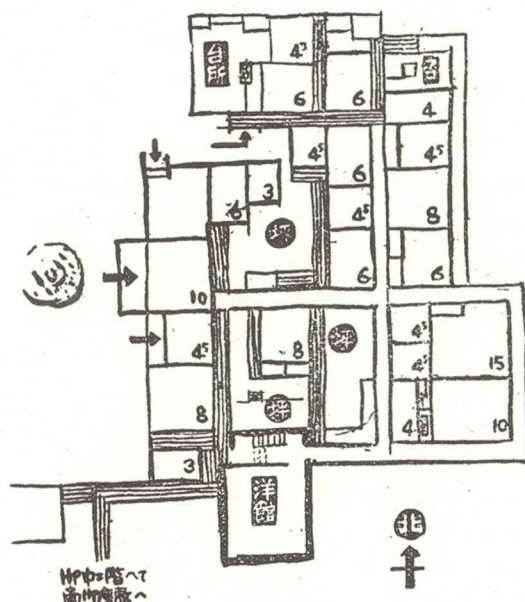
なるほどそうだ。しかし考えてみると料飲停止の世の中に現在京都にはいかに旅館、料理店候補の建物が多いことか。性にピッタリあつた轉用をしようとするれば、昔の大邸宅というところすぐそういう用途しか出てこないというのは何を物語るのであらうか。

旅館にしても住宅の變種であることを考える

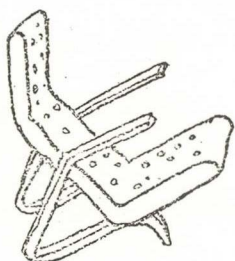
と、これは不思議ではない。しかし大邸宅が多数の世帯の小住宅にはかわりにくいが、旅館ならきりかわる——ということは、日本の生活様式の未開さ、非社會性と、住宅構造の消耗性と古い家族制度を反映する獨立性のない間取り、などがからみあつてることによる。構造の方は出來てしまつてものだからしょうがないとして生活様式の難点は將來われわれの生活がかわるにつれて價值がかわつて行くだろう。今では旅館や料理店という寄生的臭氣のこゆいものしか用途がないが、やがて働く人々の生活にむすびついた。例えばクラブといつたようなものにもつと重点がうつて行くべきだろう。單に昔の大住宅の轉用についてのみならず、將來の住宅を思うにつけても痛感されるのは、この生活様式上及び構造上の未開さをなくすることである。

羊頭をかゝげて狗肉をうる見學記になつてしまつたが、これで實をはたすことにする。

—1948.3.2—



将来の住宅



西山卯三

(1)

人類はいま原子力時代の扉を押して一步中へふみでたばかりである。この新しい時代の大饗宴場へわれわれが入りこんだとき、そこにどんな食卓がまちもうけているか、われわれのすまいがどんな風にかわつていようか——こういつたことを半ば空想をまじえて推測し、えがき出してみるのはなかなか楽しい。また必ずしも無益ではなからう、なぜなら、日常の生活に追われているとつい歴史の大きな流れをみうしない、しらすしらすにくだらぬことに心身をつかれさせて、ものごとの本質をみる眼をうしなう危険が多いからだ。しかし私が今こゝで書くのは、こういう住宅の未来ものがたりではない。

いまわれわれのもっている『住宅』はいろいろな点で缺陷をもっている。どんな缺陷をもっているか。それをどう更めればいゝか、そういう現實の要求を微分し、更に積分することによつてゑがき出されてくる『よりよい住宅』——これを目前の課題として、将来の住宅という題目にこたえたい。

(2)

二に昔まえ住宅の改善がさげばれたとき、ちょうど第一次世界大戦争のあと日本の資本主義が一段と隆盛を加え、ひとびとが西洋の風を比較的自由にとり入れようとしたときのことだが、疊式の生活をやめて椅子式にかえるということが主張された。すまいで疊の上の和服生活をしていると、公けの生活は殆ど洋服の椅子坐生活であるから、

衣服も、住み方もすべて二重になる。この二重性があらゆる無駄の根本原因になつてゐる。家具が複雑になる、もつものが二重になる。せまいすまいをよけいせまくしている。これをあらためよう。活動的で衛生的な椅子坐式に……というのである。つまり混亂している住まい様式を何か統一ある合理的なシステムに組みたてようという主張であつたと考えられる。趣旨としてはこの主張は現在でも正しい。二重生活の改善、すまい様式の整頓と單純化——をもたらす住宅の改善、これがまづ第一にあげられる将来の住宅の條件である。

(3)

戦争後アメリカの生活様式がなにかにつけてよく引あいに出されるが、アメリカの婦人記者が日本人の家事作業のやり方をみて、その不合理、非能率におどろいたということは家事を問題にしているわれわれがなるほごと思つたことだつた。

日本のすまいの家事のわづらわしきは、炊事にせよせんだくにせよ育児にせよ、あるいは掃除やかたづけにせよ、すべて設備の原始さということに最も大きな原因があると考えられている。アメリカ的生活様式から判断するとたしかにそうだ。しかし、われわれがみんな各家庭に電気冷蔵庫や自動皿洗機、自働車をもつたとしても果して家事作業がどれだけ簡単になるか——アメリカの子供をもつ婦人のなげきをきくまでもなく、うたがわしい。從來の家事經濟のいとなみ方はすべて個人主義經濟の原則でつらぬかれていた。生産の生活は社會化されているのに、消費生活は、個人個人がまゝごとの様にコマギレにしてやつてゐる。そのため家事作業がどうしてもかさんできて、如何に能率化し機械化しようが結局主婦という家事労働にしばらくつけられた人間が必要になる。男女の平等も婦人の解放も——無論それを機械的に解釋することはまちがつているが——この個人主義も家庭經濟のタガをゆるめなくてはとうてい實現されない。

いろいろなすむための設備を共同化し、住まい生活を集團的におこなう、つまり生活の社會化ということが從來の住宅を考えるについて大きくとり出されねばならない條件である。

(4)

従来の日本のすまいにもへやというものはあるが、たいてい紙障子とか、ふすまとか簡単なもので間仕切りされてい、また出入りに通りぬけねばならぬものが多くて、獨立した室というものが無い。と同時にすまいは家族全体の共同のくらしであつて、その中に個人々々の私の生活というものがあるが、ほとんど行われ得ないようなしくみになつてゐる。ぺんきようとか身じまいとか、睡眠とか仕事の能率上、風紀上、あるいは保健上ひとりひとりが別々にいとまねばならぬくらしも、家全体の共同のくらしの中に一緒たになげこまれてしまつてゐる。個人の人間性というものが無視され、健全な夫婦生活もできなければ、高度の文明社會の一員となつて行く個人をそだてる環境としても不十分である。しかも家のつくり方が万事『家』本位にできていて、家を社會から隔離することにのみ力が入られ、家は社會から高壁をめぐらしてシャ断され、立派な門がまえ、中に入ると玄關、客間、應接室、座敷などという家族のくらしには直接かゝわりあいのすくない部分が大きな顔をしてのさばり、くらしとすまいを窮窟にしている。つまり住宅のつくり方が長い間の封建的な家族制度、社會慣習にしたがうようにできていた。そういう住宅のつくり方を新しい民主主義社會の家庭生活に適合するような形に根本からつくりかえねばならない。

(5)

民主主義革命が進行しつつある現在、このうつりかわりと關連してとくに上述のような在來住宅の缺陷が指摘されるが、そのほかあらためるべき点はまだまだある、従来の商業主義的な借家のつくり方を再検討してほんとうに便利で能率的ですみよい間取りと設備をもつた住宅をつくることもその一つだし、ブタの様な密集したすみ方をあらためることも必要である。

住宅とピッタリあつた能率的でつかいよい家具をつくり出すこと、採光通風、保温など保健的な條件を満足させることも必要である。なかでも建物が密集する都市では何をにおいても住宅を不燃化することが必要である。また、戸々の住宅のつくり方ばかりでなく、全体の配置、公共施設や都市

計畫が、すみかとしての住宅をふくむ全体のくらしを健康にいとませるようにできていねばならない。

(6)

しかし、このようなわれわれの住宅にのぞむ願いはすべてが今はじめて言いだされたことではない。であるのになぜ實行されなかつたのであろうか。それはわが國の現在までの發展が富國強兵などといわれながら實は軍備をおこし隣國をいためつけることばかりに力を入れて人民大衆の生活は頭からおさえつけられ、低くめられてきたからである。つまり農村では農民が高い小作料でしめつけられ、食うに困つて都會へ出てくる労働者は食うや食わすの安い賃銀で働かされた結果、充分な住宅にすむだけの家賃が拂えず、ひどい家を建て安い家賃でかすやり方が一般となつたため、よい住宅など極樂淨土のはなしで、封建時代以來の『起きて半帖ねて一帖』だの、『うき世の假すまい』などというあきらめがいくことだとされてしまつてゐる。こういう人民のくらし、人間的な要求を無視したやり方、考え方をまづあらためなければいかに住宅の改善改革をきけんでもそれは實現されない、憲法第25條にいう『すべての國民は健康で文化的な最低限度の生活を営む權利』を實際にもち得るよう、政治や經濟のしくみが一步一步かえられて行かねばならない。

(7)

しかしまあ待ちなさい。何しろわが國は戰爭でまけて、420万戸といういまの生産力、經濟力ではどうしようもない住宅不足においこまれてゐる。住宅をよくするといつてもそう急によくはなりませんよ——と、かなり『わかつてゐる』人、いやむしろ小才のきく人ほどそんなことをいう。果してそうであらうか。斷じてそうではない。

この人たちは今のわれわれの住まいのみじめさを420万戸という住宅不足に原因があると思ひかけてゐる。しかし今の人民の住まいのみじめさは決して420万戸の不足によつて生じたのではなく、すつとその前からあつたものである。ただ戰爭で(イカサマな算術でわり出したこれだけの數の)

(18頁下欄へ續く)

随筆



家といつても、法律的な意味の家でもなければまた封建的な制度を連想する家の概念でもない。私が、これから述べようとする家は、家庭の営みをする家であり、人間の棲む家のことである。

日本式の家、即ち住宅について、私は、ずっと以前こんな面白い話を聞かされたことがあった。

それは、日清・日露の兩戦役で、日本が勝つたので、世界の人々は、世界地図の中から、虫眼鏡を使つて、やつとのことで、東洋の一隅に日本という小豆粒ほどの國を發見した。そして、彼等は、こんな小國のどこに、あの清、露のような大きな國を戦争で負かす力が潜んでいるのか、と多大な疑問を抱いた。

住宅が不足し、みじめさの度合いがきつくなつたにすぎない。戦前はもちろん現在でもゆたかな住宅をたのしんでいる人間は澤山ある。こういう不公平、不合理をそのまゝでいくら住宅の復興をさげんでみたところで、結局家なきものゝ叫びをうまく利用していゝ眼をしようとする人々の餌食になるだけにすぎない。

日本人は獨善的に、われわれには大和魂というものがあるのだ、と手前味噌の勝手な熱を吹いていた。世界の人々の日本に對する熱心な研究が始まつた。そのうちでも、随分ものすきな、閑のある外國人は、日本人の常住する家の構造について好奇心をもち、種々調査研究した結果、その結論の一つとして、日本式住宅はすべて木と土と紙で建築されている。中には草を多量に使用しているものもある。そのため、柱と柱の間、襖や障子の合せ目、或は障子の紙を通して、室内の空氣と外氣との交流が常になされる。即ち換氣裝置が自然に出來ているので、日本人は至極健康体に恵まれている、これが、日本人の戦争に強い原因である。というのであるが、諸君はどうお考えですか。

こんな話は、全くのナンセンスであり、日本の家に對する外國人の皮肉であると解釋して、恰度いゝくらいの話であるのに、つい一昔まえまで、これを本氣で他人に話して聞かせた日本人がいたのだから困つたものである。

もし、かりに、この話に述べられていることが事實であるとしたら、今度、日本が無條件降服したのは、日本住宅はあまり換氣がよすぎて、國民は全部風邪にかゝり、熱にうかされた結果である。と説明してもいゝことになる。これこそハイセンカタルという病名であると落をつけたら、立派な漫談になるというものである。

私はこの原稿のはじめに、こんな昔物語りを書いたけれども、家の構造が、その家に住む人間の健康に、全然影響を與えないものであるなどという考えで、これを書いたのではないことを特に斷

住宅問題の根本はどこにあるか。そのありかをハツキリつかんで、それをあらためて行く復興でなければ、いかな建設も、すぐれた設計圖も、結局のところ人民大衆には縁どおいものとなつてしまふだろう。

將來の住宅を考えるにつけて、私はこのことを切に思う。

—1948、4、10—

つておく必要がある。何故かといえば、私は、家の構造は、その家に住む人間の健康に、食糧と同じ程度の影響力を有するものであると確く信じている者の一人であるからである。

アメリカの大都會では、アパートを建築して、その部屋を一週幾ドルかで、市民に住宅として貸す場合には、一應當局え届出る。そうして係官がその建築物を検閲に来る。この検閲官の中で特に強力な権限を持つて検査するのが、火災豫防と出火の時の消火設備、住居人の緊急避難設備等の消防警察官吏であるとのことである。

勿論、これらの消防警察官吏には、わが國の背徳官吏のように、その強力な権限を笠に着たり、または、これをむやみと振り廻すものもなければ、その係官から設備の不完全を指摘されて、その補強を命ぜられても、わが國の建築業者に一人もいないと同じように、これを何とか内密でもみ消してもらいたがる不心得な家主はアメリカにもいないそうである。

(人間の生命財産を保護するための、正當な命令をもみ消そうとするより、火災を未然にもみ消すように、その命令を遵守した方が、何時かは家主自身の利益になるのだから……。)

災害豫防について、保健衛生の観点からも、細い規則に照らして嚴密な検査がなされる。喚氣をよくするために、窓や入口のドアを、日本式の障子にしるとは決していわないそうである。

嚴寒時に於ては、室内の溫度を午前中は何度以上に保つように、午後は何度より以下にならないように、子供達が部屋で着替えなどする時に風邪にかゝらぬようにと、人間の常住する家として恥しくない萬全の設備を、法律が要求しているのである。——感違ひしてはいけません。これは、はじめに書いた如く、アメリカのある大都會での話です。——柱と柱、襖と襖、障子と障子の間隙や、障子紙が外氣を吹き込む通路になつて、健康のためにいゝなどと、外國人からほめられて、それをまた喜こんでいる國の話とは、とても雲泥どころでなくて、火星と海底ぐらゐの相違があらうというものである。どちらが火星で、どちらが海底かとお尋ねになるんですか？さあ、それはその人の好みや趣味によつて異なります。

茅の柱に 茅の屋根

手鍋さげてもいとやせぬ

なんて、誠に原始的な非文化的な家に住んでも、愛するお方とならばいゝという人もありますからね。もつとも、今時、こんな結婚生活で我慢してくれる相手は、恐らく發見出來ないでしょう。

さて私は、日本式の家の悪口ばかりを書いたが、その良きのあることを否定するものではない。本格的な設計のもとに、新しい生活様式を考慮に入れて建築された日本式住宅には、純洋風作りの住宅に勝るとも決して劣るものではない。

しかも、日本式の住宅に、贅澤かも知れぬが、日本式の庭があり、廣くなくとも、青苔のむした石燈籠や木石が、程よく配置されていて、それにうち水をして、見るがらに涼しそうな風鈴の吊つてある縁側で、夏の夕べのビール一杯などは、到底洋式の住宅では望み得べくもない日本住宅獨特の風趣とでもいうものである。

併し、こうした日本式住宅の風情や雅趣や枯淡味によつて、一日の疲れを慰められるほどの住宅に棲む日本人が、果して幾人いるかという問題である。正確な統計によつたわけではないが、恵まれた日本式の家に、楽しい生活の營みを續けている日本人は、恐らく全日本人の十パーセントには及ばないのではないかと想像する。

全國民の一割足らずが、享樂する日本の住宅を、日本式の住宅と呼ぶことが如何に潜越なことであるかはまことに明かなことである。日本人の九割以上が、只單に文字通りに雨露をしのぐだけの犬小屋に等しいマツチ箱式な家、その雨露も満足には凌げない巢の中でごろごろとやつと生きている。これこそ世界に誇る？日本式住宅の姿ではないだらうか。この情けない現實は、敗戦によるものではない。未だ戰の始まらない昔からづつと引續いている現實である。ただ、敗戦という事實がその好ましくない現實に拍車をかけたというに過ぎない。

戰災者の多くや引揚者の大部分の人々は、六疊の部屋に、二組、三組の夫婦が子供連れで雜居しているのが現實である。こんな家庭の秘密性の保てない雜魚の如き家庭生活から、正しい社會の秩序を維持するに足る道義心が生れる筈がない。

ヤミ一掃 藤原セイケン



「日本中からヤミ屋を一掃するには日本中を刑務所にしくはないかんの」

「大臣—それでは議事堂もそこに持つて行かなければなりませんまい」

衣食たりて禮節を知る。この言葉に一つの眞理を認めるならば、私は、家さだまりて増産を見ろといふたい。勿論、家のさだまるところから禮節を知ることの方が衣食のたりた場合よりか、眞理に近いと思う。幾等衣食が充分でも、住の定まらないところには決して禮節は生れない。もつとも衣食の衣のうちに住を含むと解するのならば、また話は別である。

特に私は、日本の住宅は、今少し家庭の秘密の保持出来る部屋を考慮しなければいけないと思う。中華の人々が、自分の寢室には他の部分より莫大な費用を惜氣もなくかけると聞いているが、誠に、寢室こそは、人間の心置きなく休憩する場所であり、疲を回復させる唯一の場所である。

日本の住宅にも、この寢室に關して合理的な考慮ばかりでなくて、愛情的な温い計算も入れて、プライベートの世界、疲勞回復のオアシスとして重点的に取扱はれていゝと強く主張したい。

何れにしても、自分の棲む家、人間が棲むにふさわしい家を有たない日本人がうようよといふ間は、決して文化的黎明もなければ、新憲法の問題も生きてこない。敗戦後、衣食住の問題がやかま

しく論議されて來たが、何時の間にもやら衣食住のうち、食の面が大きくクローズアップされ、衣と住の問題は少くとも食に従属するかのよう取扱われ方である。

私は、人間の健康に對して、家は食と同じ程度に影響するといつた。そうだと確く信じている。その点からも私は、住は食と同程度否それ以上に重点的に取扱われても、決して間違つてゐるとは思わない。住の問題の解決によつて、自から食の問題の解決が可能であるとも考へてゐる。

歴代の政府が、主食の供出、農村對策等に主力を注ぐ割合に、住宅の問題に關しては、如何にも生温い對策しか有つてゐないよに感ぜられたことは誠に遺憾なことであつた。

今次の政變にあたつて、芦田主班の政權に關して、社、民、國の三派の政策協定が成立した中に、住宅問題を具体的に解決せんとする強い意思が表明されたことは、まことに喜ばしいことである。われわれ國民は、その政策の實行を充分推進し、監視しなければならない。また今後は家の建築に當つて、贅をつくすことよりか、新しい生活様式にマツテするような文化的な工風と、家庭生活の愛情が、設計の中に充分取入れられるべきであることを、最後に特に強調して、擧筆することにする。

タカラ風呂 タカラボイラー



ビックリする程
早く沸く
風呂とボイラー
二十有余年の経
験を有し最高の
製品と技術を誇る
御愛用を！



大阪市浪速区賑橋西詰角
株式會社 **タカラ商會**
代表取締役 保科通治

夢物語り



私の住みたい家

山本一人
米政子
伊豆隆

南海
おろ
一人

こんな家にこれから住みたいと思ふ前置に私は其家の周囲の理想的な環境を先ず第一に考へます。それは『ビジネス』を中心としたアメリカに見る都心の『アパート』か、又は住を重くした自然に親しむ田園が良いか、各人各様の考へ方で長短は討論會の問題でしやうが、常は都會に住んで居り、他の風光地に週末の家でも吾々に出来得る時代が來れば別ですが、現在

として私の家は、やはり職業柄でしやうか、廣々とした静かな郊外が良い様に考へて居ます。

然し、健康的な明るい田園では有りまして、自分の思ひ思ひに、家を建て、それぞれに何等の機能的な連繋を持たない様な物では無しに、私の『ユートピア』は充分に文化施設の得易い一つの計畫を中心とした集会的な田園都市と云ひましやうか、そう云ふ處に住みたいと思います。

交通機關の驛を中心として、それに吾々が生活に必要なだけの施設……學校、病院（應急的な）郵便局、買物市場等、即ち都會の一つの『ブロック』が計畫を持つて集合されて居る様な處に、手近な私の桃源境を見出します。

さて今度は住宅ですが從來の吾々の習慣上住のみ衣服から、かけ離れて歐米の家と云ふわけにも行かんでしやうが、吾々が友人などを訪ねても良く洋服のまゝで、家庭で過して居る人が多く、又

私も生活の簡素化と云ふのも有りませんが、洋服のまゝで過す事が多くなつて來ました。疊の上の洋服ではなんだか窮屈で、日本人でも永年アメリカで暮した人は、やはり椅子の生活が疊より良いと云はれる様に疲れて家に歸つて、すぐと疊の上に不行儀に寝轉んだりするより、安樂椅子の方が良いなと思つたりします。順次吾々の生活も變つて來るでしやうが、私は將來椅子式の家に住んで見たいと思つて居ます。

然し生れてからこの方ずつと疊の上の生活に馴れて來た吾々は、やはり疊の味も捨て難く一室だけは残して置きたいと考へて居ます。

日本の家が幾千年來考へに考へて日本の風土に適する様に出來て來たのでしやうが、今少し夏は涼しく冬は暖くならないでしやうか、手先のみ暖める火鉢では無しに、例へば朝鮮等の溫床の如く床下に暖房を採つて、その家で椅子式の生活はと考へます。幸い建築の専門の方々が讀まれること皆様の新しいプランは、これをテーマとして有りませんでしやうか。

吾々が生活上一番今迄憂鬱に感じて居た事は、その非衛生的な事でした。鼠と油虫と蠅を、水洗式の便所と台所の改造に依つて流行病の媒介所で無い様にしたいと思ひます。

『贅澤で無い贅澤』吾々の家庭に電氣冷蔵庫は有りたいものです。吾國の風土にマツチされた、科學化された設備を持つ家、余りに漠然としたお答へですが、これが私がこれから住みたい家です。

末政清子

●廣く大きくとも貧乏住宅

廣い大きな家は、家人の手も充分揃つてゐて、毎日毎日箒の先のいたむ事や雑巾の布に心配のない、のんびりと掃除ばかりに明けくれる人が居てこそはじめて気持ちよい住いであつて、廣く大きい上にその家に氣品がついて、一層立派に見えるのである。

戦時中から敗戦後にかけて、家庭の仕事に對する人手は、家の大小に關係なく、全く主婦以外には皆無と云つてよい状態であり、拭き掃除に入用な雑巾の古布も、次第に少く、家の内外の清掃が行届かぬ様になり、あちらの隅にもこちらの隅にもすゝが下り、舞はくちて例れかゝり、門にはどろはねが、こびりついてゐると云ふ有様では、裏長屋の小さくとも、拭き細れがする程きちんと掃除の行き届いた家よりも、よほどみすばらしくいたいしたい。

●郊外に住むとすれば、茶席や 往古の庵室に住みたい。

小さい家、必ずしも貧乏くさいのではない。小さくとも氣品のある家屋と云へば、誰しもすぐに茶席を頭の中に浮かべる事と思ふ。尤も茶席は材料を選び數寄屋大工が十二分に手をかけてゐると云ふ點で、安普請の極小住宅と同一視する事は出来ない。又茶席は元來茶會を催す爲の建物で、主客が調つた美しい食生活を行ふのが主で、生活全體の場所ではない。しかし完全な手入と掃除の行きとどいた瀟洒な建築と庭園の一連を思つただけでも気持ちがよい。贅澤な理想ではあるがいつもこの様な環境に住みたいと思ふ。自分一人でこの様な環境を作り出さうとすれば、日常の掃除手入に相當な努力の要することは覺悟しなければならない。

斯様に茶席専用の建物ではなく、往古聖者が住んで、それぞれ今でも残つてゐる大阪府布施の慈雲尊者の雙龍庵(?)京都府八幡に近い松花堂昭乗の松花堂、一乗寺にある石川丈山の詩遷堂……等がある。何れも、茶をたのしみ煮炊き、寝起きを

なし、佛典、漢籍、書畫を楽しんだ生活の場所である。大阪に近く又大阪に一番縁の深い慈雲尊者の雙龍庵についてみても、あの小さい建物を隈なく空間利用されてゐる點に頭が下る。尊者は學僧であつただけに、細かく頭が働くのと數多い藏書の置き場に苦心されたのではないかと思ふ。大分前に見學したので、記憶が薄くなつてゐるが、縁側の鴨居上に戸棚がつけられてあつたり、角を利用した三角戸棚等もあちこちに設けられてあつた。又近頃の様に燃料不足には丁度よい作りつけの助炭の様なもの、たしか爐に取りつけられてあつた。又其の爐の上部を戸棚にしてあつて、常に乾燥してゐるので湿りをさらう食品の貯藏場所に好適だと感心したのを覚えてゐる。

この様な庵室に住みたいと云へば、何だか隱遁生活を想像されるかもしれないが、隱遁生活ではなく、世の中とのつながりはしつかり持つてゐて社會の爲に役立つ生活を送りたい。

●大都會のまん中に住むとすれば、 完全なアパートメントハウスに 住みたい。

從來の下宿屋まがひのアパート、特に大阪には多かつた一室アパートは、一人者にはよいとしても、家族のある家庭生活を営む場所ではない。都市計畫が完成し、實施され完全な不燃性共同住宅が建てられ、住宅問題解消の日が一日も早く來てほしいものと思ふ。

完全な不燃性共同住宅即ち鐵筋コンクリートのアパートメントハウスと云ふ事になると、建設者經營者、居住者等全部が、從來の和風木造住宅とは住宅の各項に涉つて根本的に考へ方を變へ、生活様式を變更しなければならないと思ふ。一戸當りの面積を決定するについても、人間一人當りの呼吸に用する酸素消費量を基準にした衛生的最少限度の居住面積と云ふ事は、鐵筋コンクリートになれば、餘程神經質に扱つてもらはなければならないのではないかと思ふ。それは從來の和風眞壁紙障子、ふすま、らんまの隙間だらけの、自然換氣の旺盛な和室でさへ、一晚中寢室として使用した室と、そうでない部屋とでは、朝掃除をしてま

わる時に、その部屋の臭気ででも空気のよごれてゐることがよくわかる。まして洋風大壁の緊密な周壁の洋室に於て部屋の空気の新鮮度と云ふ點に於て、寢室の問題のみならず、電熱でなく炭火を多く使用する我國の燃料事情により、十分な注意が必要だと思ふ。

床の状態も從來の和風疊敷が習慣になつてゐるので、疊に對する執着がまだまだ若い人達にも多いかと思はれるが、鐵筋コンクリートの床に直接たゞみ敷は、吸濕性、吸水性、吸塵性の點から衛生的によくないし、又疊の保存上から云つてもよくないのではないかと思ふ。

敗戦による頭の切換へをこんなところへも、いさぎよく應用して思ひ切つて全部を、椅子式に改め、椅子、卓子、寢台、洋服ダンス其他合所用具に至るまで設備し、經營者持ちとし、居住者は損料拂ひで借用し、大切に扱ひ、轉居するときは、トランクや行李位で、簡単に任地から任地へ轉居出来る様であれば、どれ程氣樂なことかと思ふ。

若い人達も、年寄りも、皆戦時中の疎開生活戦災に罹つた事による、やむを得ぬ簡易生活により、昔からの複雑な、我國の生活習慣から、大分抜け切れて來てゐる事だらうから、以上の様なアパートメントハウスの生活は、大いに共鳴してもらへるのではないかと思ふ。

●狭くとも快適に

郊外に住むとしても、又大都會に住むとしても外部からの家庭労働に對する協力者が無い限り、又あらゆる生活資料が豊富にならない限り、廣い大きな住居には住みたくない。自分の體力、能力に應じ、相當な文化活動に従事出来る時間と餘裕を持ち、狭くとも家の隅々まで、掃除が行き届き、整理整頓もさることながら、其時節々の室内裝飾が、すつきりと調つてゐて、何とも云へない愉快さのある家庭雰圍氣に住みたい。

しかし主婦は相當な努力と忍耐が必要である。住宅問題解決と共に、家庭の完全な電化と、主婦への全家族の理解と協力が必要である。

(昭和23年3月8日)

伊 豆 肇

私の食べたいもの、私の着たいもの、それに此の題の私の住みたい家、と言ふのを誰でも書いてら、夢物語り三部作が出来そうです。それ程現實とかけ離れた昨今で、亦、たとへ戦災でこんなに家が焼かれないとしても、だんだん人間が廣い土地を持つ事が困難になり、そして押しこめられて行けば行く程上に伸びて、家の中から自然の姿を見る事さへ出来なくなりそうな始末です。

如何考へても、今の所、私が住みたい家は、現實に住めそうもありませんので、ひと思ひに、私の頭の中にある、夢物語りの私の住みたい家を御披露しようと存じます。

その前に、西歐の近代建築が、押釦、スキツチ、化粧室、靴拭ひ、鍵穴、電線、果は盜難除けベル等、窓から見えるものは、直線で組み立てられたビルや、それに三角や四角の線ばかりではとても殺風景でたまりません。ライトニング、ロツトなどは科學の粹でせうが、何かぎらぎらしたものを感じて、余り見た目も氣持の良いものではありませんが、どんなものでせう。刈りとられた芝生とテニスコートの中に、正方形の建物では、余りにも、自然に反抗してゐる、悲しき抵抗の姿です。

私は建築家の最も大事な感覺の一つは自然との調和にあると思ひます、自然との調和を、如何處理するかと言ふ才能にあると、思ふんです。建てられた家が、大變立派であつても、自然と調和してゐなかつたら、立派な建築とは申されません。

そこで私の住みたい家は、よく自然と調和した他所の人達が見ても楽しい家、御近所の人達が、私の建てた家の爲に、御迷惑を蒙らないし、亦其の地に遊びに來た人達からも、額に皺など寄せられない様な家の中に先づ住みたい。そうでなければ、いくら家が立派であつても、決して住み心地はよくありません。

それで、自然と境を接する屋根の線ですが、私は如何も直線と言ふのが余り好きでないので、夢物語りの第一歩は、屋根を、曲線か、波狀線、律動的な線で先づ自然と調和して貰ひ度い。そして其の助けとして、樹々の緑りで圓で貰つて、平和な住み家と、先づしたい。

『硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い實の結つた櫻もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのが、直ぐ眼につくが、其の他に是といつて數へ立てる程のものは殆ど視線に入つて來ない。書齋に居る私の眼界は、極めて單調で、さうして又極めて狭いのである。』

これは漱石の『硝子戸の中』の書だしの一節ですが、私はこの文を書く前に先づ頭に浮んだのは、理想的な書齋でした。書齋と言うものは、もう私達にとって、生活の中から切り離せないものになつてゐます。

此の作品から私は文豪の書齋の様子が想像出来ますが、お隣りの中國の讀書人も、書齋には仲々凝つて、特に窓外に對する關心は相當のもので、樹木、築山、流れと橋、小舟、菜園、果樹、草花、亭、廻廊、端反りの屋根等、いろいろ並べましたが、斯ふした人々の極致で、逆に自然の雰圍氣を出そうとする氣持はよく判かります。

それで私の書齋の設計ですが、全部硝子張り、それも磨硝子の二重にしていたゞきます、外は自然の樹木をあしらひ、鳥が啼き、花が咲き、四季の變化を眺め、部屋の中は常に住み心地のよい、暖さと、溫度とを保つて。

私は籠の鳥は、人間の宿命を思はせ、温室の花は人間の生活の苦るしさを表現してゐる様に感じます。春は青芽を、秋は紅葉を、籠で啼くカナリヤよりも、庭に來る簞鷺を愛します、そして世界中で、最も四季の變化の豊かな日本の良さを硝子の書齋から充分味ひ度い。だゞ私は日本の家に在る炭と蒲團を此の際迄放致します。これは毎日埃を製造してゐる様なもので、此の二重硝子の暖房を利用して、寝る時も、蒲團の要らない暖さにして石炭も、木炭も家の中から姿を消して貰ひます。

そして此の書齋の中の、ピアノも、電蓄も、テーブルも、本棚も、全部硝子張り、書齋の中は硝子とメカニツクなものだけ、外の自然の風景と全然反對の中で、私は好きな本を読んだり、書いたりしたい。

外は秋になると枯れ葉が一杯溜つてゐる、部屋の

中は塵一つない、こんな環境を私は大變好ましく思ひます。

叔、こゝで、私の夢物語りを發展させれば、清朝の西太后は、一食に百皿の菜を食べたと言ふ毎食の豪華な献立てに、羨しい限りですが、お風呂の方は銀の盥に湯を入れて行水をされてゐたらしい、私は銀の盥の行水よりも、一日二回風呂に入る設計をする。

風呂は青磁のタイル張り、洋式のバスは感心しません、錢湯にある位の大きさの湯ぶねに、朝夕に限らず、一日中浴槽に滿々と、湯をたゞえて、その風呂場にはラジオがあり、湯にひたり乍ら、音楽を聞いたり、ニュースを聞いたりする、テレビジョンがあれば、それも置いとく。亦脇に、寝台、ソファアを置いて、出て來ては、お美味しいお茶を、私は浙江の龍井が好きなのでそれを用意して貰ふ。

私は趣味として、入浴し乍ら食べる事が好きで湯ぶねの端を食卓にして、そこで、珠玉の細粉をもつ茶碗に、麵條兒に焼鴨子をそへて、湯に浸り乍ら食べれる様にしたらば楽しい。此の方の話は、私の食べたいものに屬するのでやめます。

次に夢物語りの庭園は、私は釣りが好きなので、自然の杜の中に、海水を、鮎や、タナゴはかんばんしくありませんので、海水を利用して庭に釣り場を設ける。我の尊敬すべき建築家に人間が住みよいと同じ様に魚の住みよい家をこしらえてもらう。讀書に飽きたら、此所に來て釣りをする。

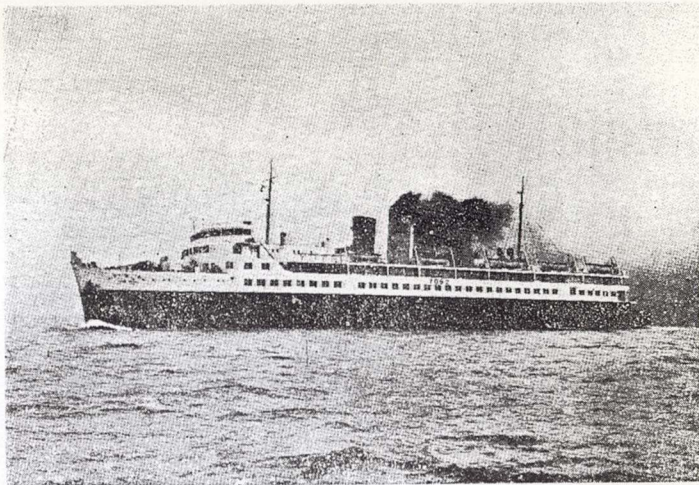
朋友遠方より來たれば、先づ好みの魚をきゞ、鮎の三杯酢に、蝦フライと決まれば、暫時の猶豫を乞ふて釣場に行く。生憎く鮎と蝦がとれずに、鮎がひつかゞつたら、亦々話は脱線しました。

夢物語りは何處迄行つても果がありません、ところで私の本當に住みたい家は、もう少し撮影所に近く、今居る所よりも一と間位廣い程度の家が欲しい。そうすれば、硝子張りの書齋も、食卓つきの浴場も、鮎の釣れる庭園も要りません。

然し其の程度さへも、目下の私のところでは夢物語りの有様です。

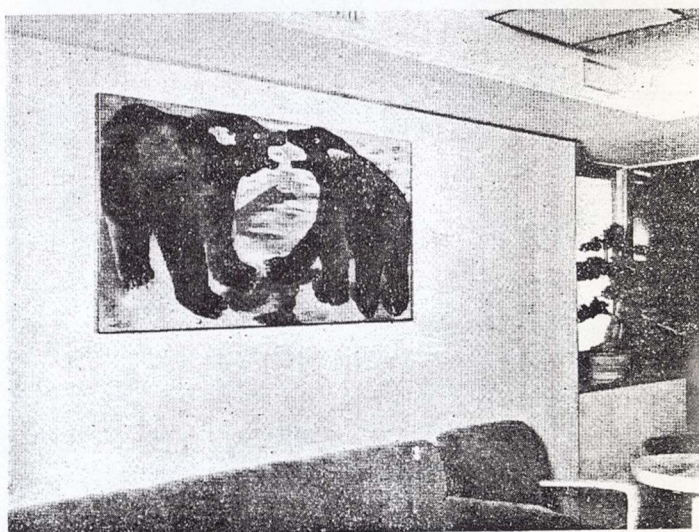
青 函 連 絡 船
羊 蹄 丸

容 姿



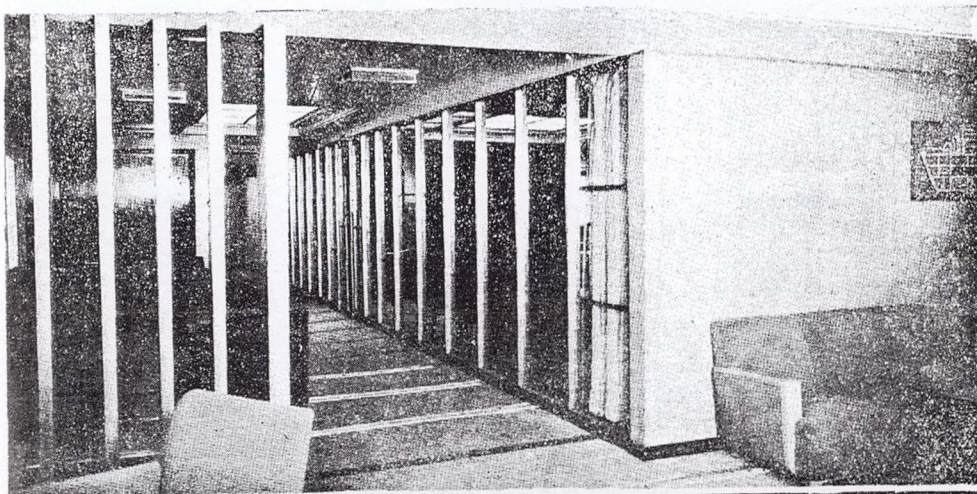
喫煙室壁面

熊ノ間=羊蹄山
ヲ配セルモノ



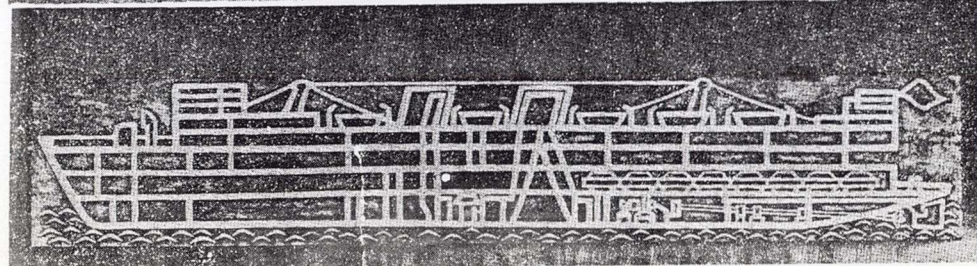
一 二 等 食 堂
並 喫 煙 室

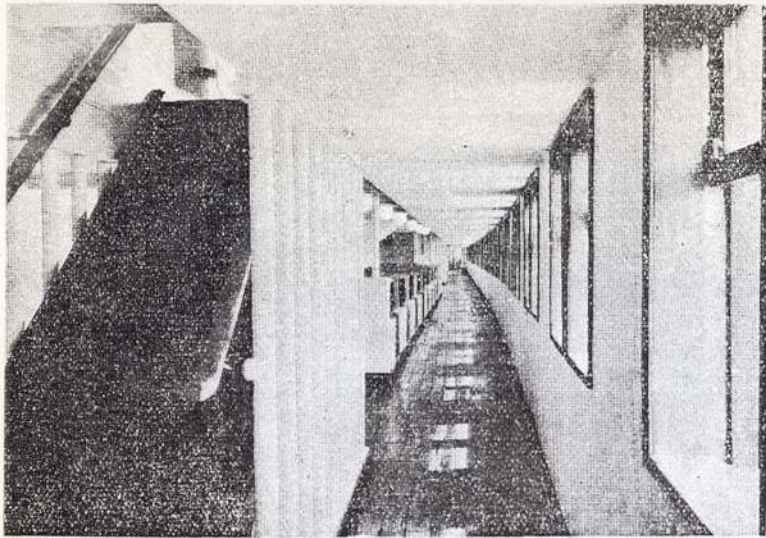
一等出入口廣間
ヨリ一二等食堂
並喫煙室ヲ見ル



一 等 出 入 口 廣 間
彫 刻

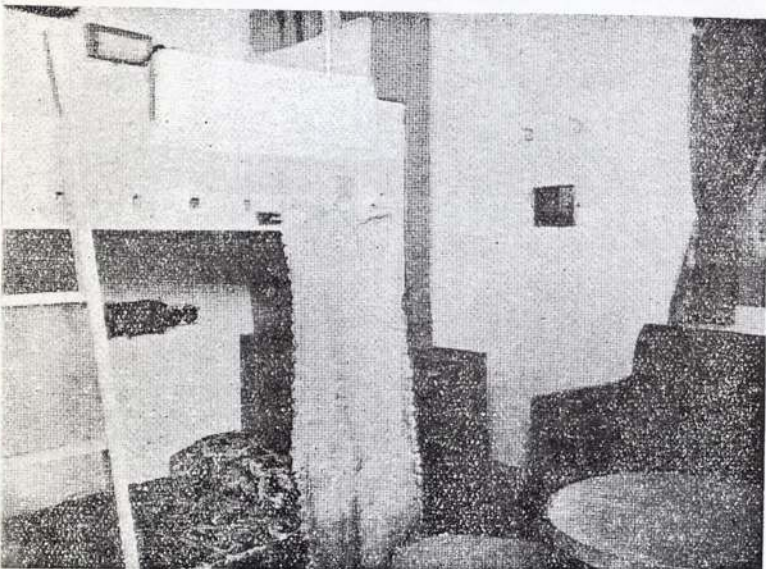
本船縦断面ヲ桐
材ニ銀箔ヲ貼リ
テ表シタルモノ





三等椅子席

本船右側
舟尾ヨリ舟首
ヲ見タルモノ



一等客室

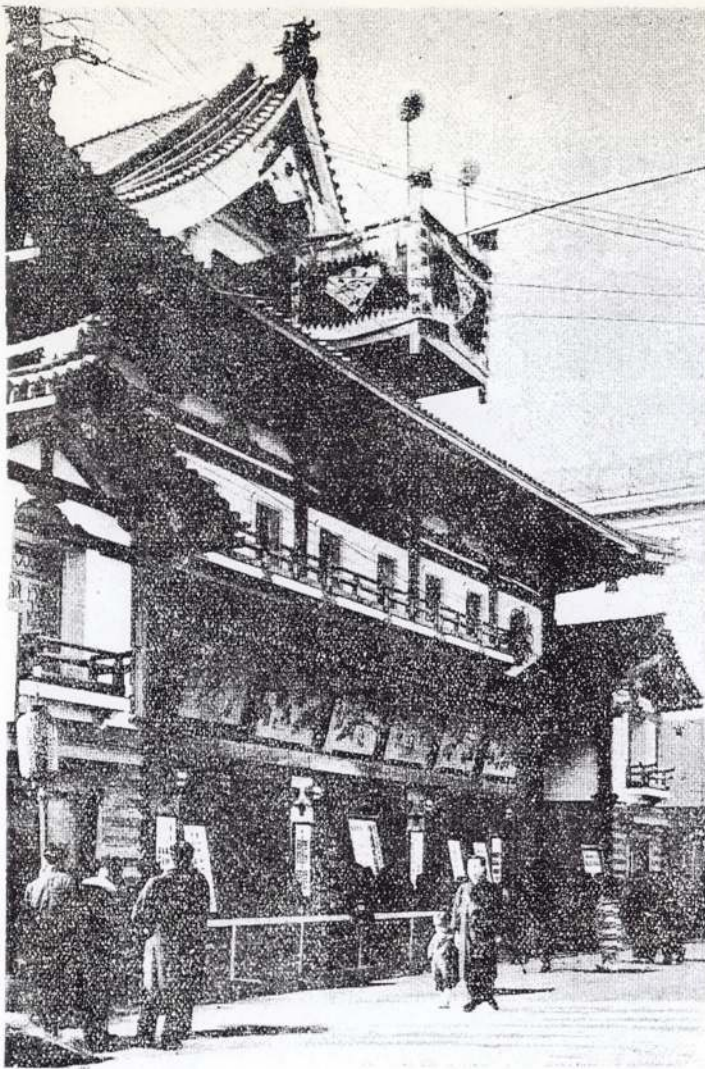
折疊寝台附ノ部屋

全長	118.70米
長 (垂線間)	113.20米
幅 (型)	15.85米
深 (型)	6.80米
吃水	4.90米
總噸數	3,500噸
搭載車輛	客車ノ場合 7輛 貨車ノ場合 14輛
主汽罐	三菱舶用三胴型 水管罐過熱器付
主機械	三菱衝動反動式 一段減速裝置付 タービン

計畫軸馬力	4,500軸馬力
航海速力	13.5節
旅客定員	一等 46名 二等 255名 三等 633名 計 934名
建造所	三菱重工業 神戸造船所
竣工	昭和23年4月9日

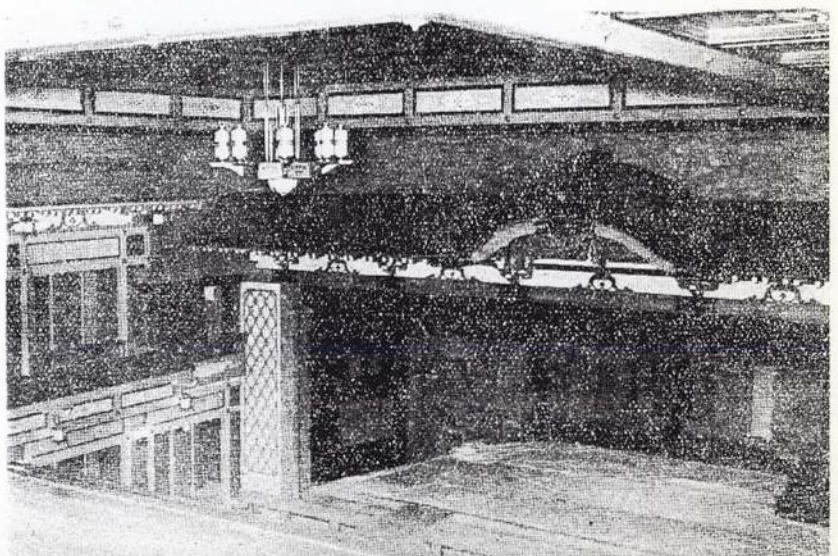
(本船ノ特徴) 本船ハ列車渡船トシテ建造サレ特ニ就航航路ヲ考慮シテ通風暖房設備ヲナシ冬期ニモ快適ナル航海ガ出來ル、列車引出ニ際シテハ船體ノ左右傾斜修正ヲ自動的ニ操作シ得ル裝置ヲ備ヘ又電源トシテ全船交流ヲ採用ノ補機類全部ヲ電化シ交流電動機ヲ使用シテキル。

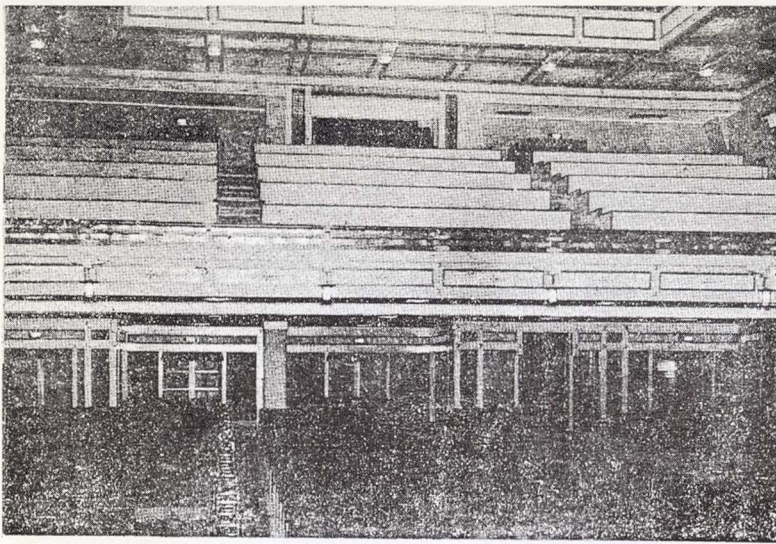
大 阪 道 頓 堀
中 座



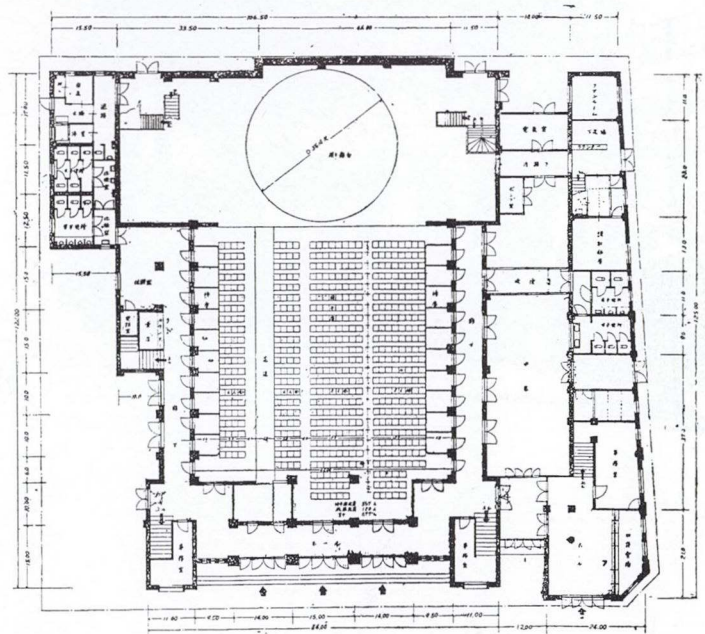
外 観

二階観覧席より
舞台を見る





觀 覽 席



中 座 説 明

一 階 平 面 圖

場 所	大阪市南区西櫛町八・九番地
敷地面積	506.25坪
建 坪	364.54坪
延 坪	737.045坪
階 数	{ 本館 三階(地階付)建 別館 三階建
構 造	鐵骨鐵筋コンクリート造及鐵筋コンクリート造
屋 根	日本瓦葺
樣 式	鎌倉及室町末期ノ現代化
收容定員	1200人
起 工	昭和22.2.18
竣 工	昭和22.11.30
設計施工	株式會社 木村組

その昔300年も前からの頃、道頓堀には『中の芝居』なる中座の前身があつた。以來中座は傳統を誇る數々の名舞台を遣して浪速の大衆に親しまれ愛されて來た極めて由りの深い芝居小舎（劇場建築）なのである。

火災でやられたのは明治9年2月と17年の12月そして今度の戦災とであつて、何れも火災には弱い木造建築であつた。

ところが中座は美事に復興されて、今度は耐震耐火の鐵骨鐵筋コンクリート造である。

私は今年の正月開場以來四回ばかり『中の芝居』を楽しみ、従つてこの建築之詳細に見學する機會に恵まれた。

小舎が無くても芝居を楽しむことは出来るといふが、私は建築と芝居を區別しては考へられない

遠くギリシヤの古代野外劇場とか日本の田舎に催まれた小屋なしの農民劇場などまた味もあり趣の異つたものとして認めるが、それはそれとしても芝居と共に芝居小屋は同じ目的をもつ文化形式として區別出来ないのである。

中座の前に立つと、先づこれは新しい綺麗な建築だと感ずる、それから、それから観る人によつて種々であらう。殊に内部へ入つて舞台の正面や天井が観客の心を楽しませてくれるあたり、人によつて想ふことが變つてくるのは當然である

古風だと考へられる方は既にこの建築の様式に注意されてゐるのであるが、これは設計の意圖に鎌倉風らしく、室町と更に桃山風の豪華さも加へてゐることで理解出来るであらう。

幕合に一わたり見廻はすと、幕切れの興奮の中に種々な色彩や裝飾がとけ込んでくることを味はう人もあるであらう。



或はまた舞台正面の上にある破風にみとれて氣分の轉換も出来る場合がある。そしてこれはみんな木で作つた建物であると考へてもよい。それ程入念に古風な木造様式を表はすやうに努力したのがこの建築である。

そう云へばこの場内に新しい木の香のないのに氣のつくことがあるかも知れない。これに對してペンキが巧みに使用されてゐることは、現下の事情で復興建築の止むを得ないやり方なのであることを識らなければならない。

楽しみの尠い今日の時勢に、僅かに與へられてゐる我々の娯樂に芝居がある。これを楽しむ時建築も亦楽しみの對象にしたいものである。

この建物の見學で特に御世話になつた木村組の方々（設計と工事を擔當された方々）に更めてお禮を申し上げたい。

電 氣 工 事 の 御 用 命 は
關西配電公認の大阪電氣工事組合員へ御願ひ致します

大 阪 電 氣 工 事 組 合

理 事 長 荒 木 健 市

事 務 所 大 阪 市 福 島 區 玉 川 町 四 丁 目 一 二

電 話 此 花 (46) 1809・1886 番

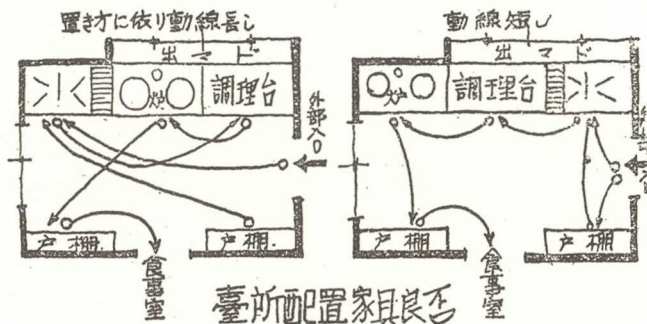
柴谷 邦

住宅は住み心地よくつくりたいのです、住宅は住み心地よく

て衛生的で、能率的で、安全であれば心は次第に落ちついて心持のゆとりができて何でもする気になります。家庭をもたない父母の膝元に同居している若い人達でも自分の住む室が快適、便利な温い室であれば、のべつに外を歩いたり友達のところにはばかりいりびたつたり、映畫や喫茶店へと放つき歩かずに自分の家え早く歸ることをいそぎますので、まちがひを起すことは少ないのです、まして家庭をもつたものにをいておやであります。それ程明るい家庭、住宅、温い室、能率的な作業場が必要なのであります。食べることが必然的に大事なことであるように住ひも亦必須欠くべからざる重要なものであります。

本校の學生に永年の間夏休の課題として歸省に際して自家實測をする習慣になつていますが、それによつてみれば製圖するのに大變であらうと同情に堪えないような大邸宅に住う者が相當に多いのであります。そして建築後百年も出てゐるといふのも五つや六つではありませんでした。家族員數による大きな

問題でない大邸宅なのです。しかるに日本の現在はどうかでありませう、多くは壊かれ爆破され、壊されて、たうたう四百萬戸以上の住宅の



臺所配置良否

住する時間が

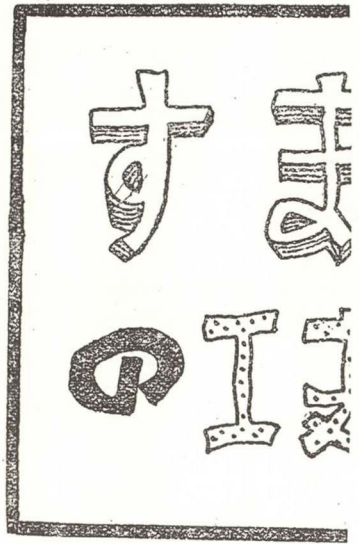
多いのですから一番意見のするわけでありませうが現在のうちに必然的要求の強められている時には今迄以上に常住する主婦が住ひ方の

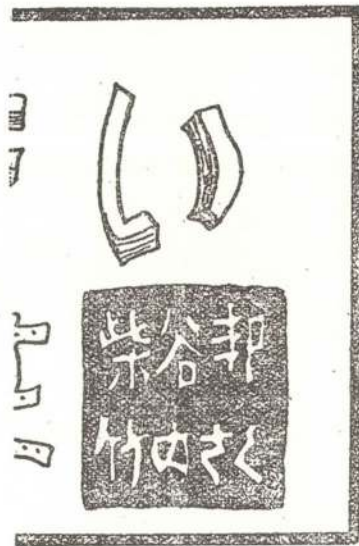
工夫をしなければならない役目をもつています。居間も台所も寢室も押入れもみな使ひ易く整理しやすくするのが主婦の任務のように思ひます、このような住宅への使命が婦人にあるとすれば住宅の設計設備等を學問的に探究する婦人があつてもあえてゆきすぎではないでありませう。構造上及建築材の使用設備等其他の智識を盛つた教育を施

すことは決して意味のないことではないと思ひます。

扱て住宅は出来るだけ多くの室を日光のあたるような方向にむけなければなりません、全部の室が日當りのよい方に向

かないとしても特に居間は絶対に日當りよい快適な方位におくことが必要です、何ぜならば家族は常にこゝに集まつて明朗な生活をしたがためであります。それには主軸—南北線を子午線に併向させるか多少東か西に振る。即ち十度内外西南へ向けると午前から午後にかけて比較的長く日光を





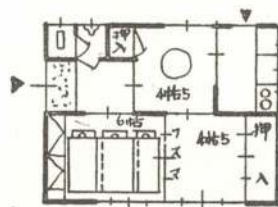
享受することが出来るからその方位に住宅を向けるのが肝心であります。そして通風の抜けられる窓を南と北に或は大阪邊は西に抜けるように工夫します。

日本では昔から三尺、六尺というように規格寸法があつたので押入は必ず奥行三尺間口六尺ときまっていますが、押入としてこのような大きさでは使用しにくくて不便であり、また立體的にも利用していないので空間が多くて無駄が多いのです。奥行九〇厘の押入はおそらく寝具をたぐんで入れるのに必要で、他はこんな深いものはいら

ないのです、押入れの奥深いものはどうせその奥をあまり利用しないのが普通ですよしや普段使用せぬものを整理しておい

たとしてもいちいち前側においたものを出してから奥を出

すのでその手間のかかり方は相當なものであります。故に寢室の押入れは奥行九〇厘として寝具をたぐんで入れ、寝具入れ以外の押入れとして洋服をかける改良押入とするなら七十五厘一六十五厘とし、幅の真中に懸垂棒をわたして洋服掛とします、若し在來の三尺の押入を改良するならば真中

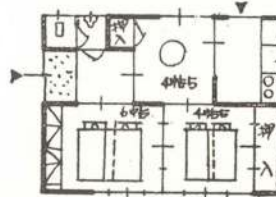


1室=集中就寢、有機的、衛生的=意匠、開放、シナオワライ

に板の仕切をして背中合はせとして室の入込みの棚としてその上に衛生箱とか針箱とか飾棚等に使へば便利でありますし裝飾の一助ともなります。

台所の日常品—茶碗小鉢等—入れの押入戸棚は三〇厘の奥行にするのが適當です。こゝこそ三尺の押入では暗くて塵とクモの巢などのかゝるものとなり、不衛生な所となり易いのです、日常の出し入れのはげしいものは浅くして簡易に使用出来るようにするには三〇厘位の深さがよい。

以上のように押入はその用途によつてその深さの考慮がはらはねばならないのですが、それと同時に立體的使用法も考へねばならないです、真中の棚の上のみに品物をあげてあとは上が空間になつていような押入では不經濟であります。入れるものによつて高さ三〇厘—四〇厘と割て棚板をつけ上手に利用する工夫をするのです、スペースの利用をすれば居室の規格住宅で申しているように、床面積の十五%の割で押入をとつても、どうにか物品を藏し整理をすることが出来るようになります、室の中に品物をだしたまゝでかくと亂雑にみえ整つた美しさはみられません。できるだけ



2室=分散就寢、空氣、柔軟、1デ衛生上ヨイ

け押入の中に藏することが必要でありますから主婦の工夫苦勞を思ひ家族は協力してゆかなければなりません。

台所は一家の健康を維持する食物の調理の場所で最も大切

な所であります。まだ主食を米にのみあふいでいるので三度三度御飯を炊き副食物をこしらえるという細かい主婦の作業がこゝでなされるので、こゝこそ能率のあがるようにしたいものであります。在來のようであれば一日三回の炊事及片付けの爲めには四時間乃至五時間立ちつづけているこ

とになり一年では九十日間台所で暮していること
になります。

台所の基準になるものは火と水と戸棚の三つで
ありますから、この組合はせを順序よくすれば能
率のあがることになります。火は瓦斯或は電氣を
使ひ、水は水道を使へば著しく簡単になります、
臭氣も多くでるところですから窓及欄間を充分に
とつて明るさと空氣のたやすく抜ける工夫も必要
であつて廊下式の台所は窓を大きくとれますので
割合に理想的の台所となります、家具の配置のよ
しあしは作業人の動線を複雑にし距離が長くした
り疲勞を多くさせたりします。田舎の廣い台所の
家具配置の悪く實施した台所調査を本年も得たの
であります。

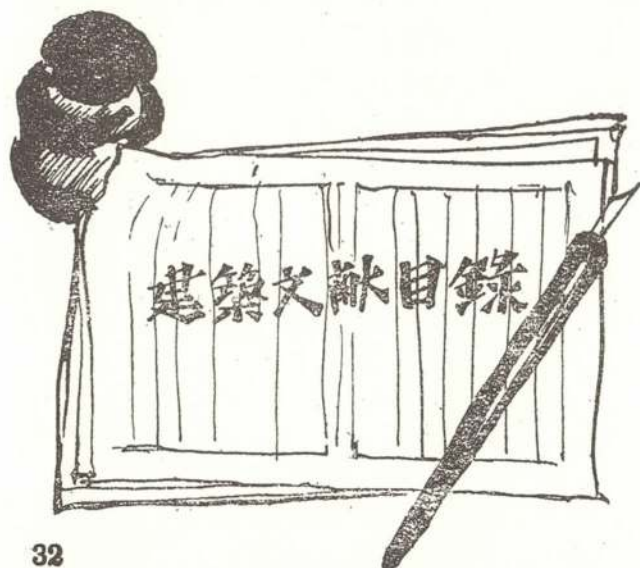
大體西洋料理でも日本料理でも調理する順序に
は大差がありません、即ち外から材料を仕入れ、
流して洗ふか材料入にのける、次には調理台で切
るか、たゞくかして鍋にのけて火にかけ味をつけ
配膳して食事室に運ぶというのが一通りの作業で
あります、故にその作業の順序に家具を配置する
ことにすれば動線はすなはにゆき交叉も少ないの
です左の圖を参照してみたいです。

廣い住宅を持つ家庭では問題のないことですが

十二坪位の住宅に三人なり四人なり住まわねばな
らぬとなれば夜の就寢には注意を拂はねばならな
くなります。日本人の一種のくせからか相當な廣
さをもつ住宅でも集つて寝る傾きがあります、す
なわち疊式の寢具の幾つも敷ける便利さもありま
せうし、大ぜいが一室に寝ることから生ずる室内
の氣温が上がることや心理的な和樂からくる暖か
さの感じもあるでせうが、これが室の空氣をひど
く汚しその上病氣の家族が一緒にいる場合には
病氣を感染させやすいのです。ですからこのよう
な場合には出来るだけ各室に分かれて寝ること、
(2)面積をできるだけ廣くすること (3)寢室の換
氣をはかること等に注意をしなければなりません。

圖のように規格住宅の六疊四疊半三疊半の場合
には六疊に家族四人みな就寢しては空氣が汚れ易
いですから四疊半との襖も開けて自由に空氣の流
通の出来るように衛生に留意することあります

以上の如く住生活は生活の大部分を支配する大
きな役目をもっているし、小さくても狭くてもそ
の住まい方一つで便利に能率的に、小ざれいに住
まわれるのでありますから、工夫して最も気持ち
よく住みたいものであります。



A 構造計畫

『電熱利用によるコンクリートの養生に
就て』 板倉忠三

『特殊木造織手の實驗的研究』
後藤一雄

『二つの平行圓形隧道の周邊應力に
就て』 伊藤富雄
以上三編は建設工學第2号所載

『撓角法』小野薫著 東大二工建築研究
所刊 ¥100

B 計畫

『理想都市』内田祥文

竹内 さく

★

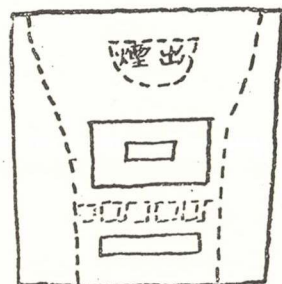
私は便利な家に住みたい。人手不足の上に用事の多い此頃、私は何よりも痛切に此事を希ふ。朝は早くから薪を焼べての代用食や交物入りの御飯拵へもむつかしく、掃除よ洗濯よ繕物よと日々一切合切凡て自家でやらねばならぬ此頃の生活はとても忙しい。その上配給行列にも立たねばならないし、目の廻るやうな思ひで過す一日は夕方になればすつかり草臥れて睡くなつて仕舞ふ。本當に物を考へる余裕も何も無い。此の秋に私は日本の家がもつともつと便利に出来て居たら日本の女性はどんなに助かるだらう、とつづく思ふ。

★

便利の内でも特に便利であつて欲しいのは台所である。床は堅い木の板張で、台所全体が同一の高さであるのが良い。下駄履で脱いだり履いたり面倒だし、床の高さに高低のあるのはどうも草臥れる。

それから、今は煙突の附いた薪用のかまどが台所内に欲しい。台所の電化や瓦斯萬能は最も望むところであるが、それは早急には現實不可能の様であつて薪に頼らねばならないからである。普通

の七輪で薪を焼べて居る家庭が澤山ある様に見受けるが、あれは台所内で使へば台所が眞黒に燻るし、外で炊けば出入りが劇しくて、無駄骨が折れるから良くない。かまどの内部



朝顔形に内部を塗つたかまど

は大きいと燃料が澤山要るから朝顔形に塗つて懷を小さくするとよい。

流しは相當大きく少くとも食器洗の桶がゆつくり二個並んで置けるだけの廣さがあり、その左に水切台が必要である。云ふ迄も無く二つの洗桶は一つは食器の汚れを洗ふためであり、他は清洗ひの爲である。

台所の窓の面積は相當大きく、又欄間等高いところにも窓をつけて光線が作業面に充分届くやうに、明るい氣持のよい台所としたい。殊に節電の必要のある現今、晝間だけでも明きの充分な氣持のよい台所で働きたい。又流しや調理台は前光線か右光線になるやうな場所に置き、配置は右から

相模書房發行『計畫』所載 理想的都市の理念より出發し古代より近代迄の理想都市を歸納的に考案し文化計畫への前進を望んでゐる

『我々の問題』『計畫』所載

日本建築文化聯盟發表

今後の建築界に望む根本問題をとく

『前川國男建築事務所作品集』第1輯

商店建築編

¥140

主に紀伊國屋書店の計畫、構造圖面や寫眞を集め特にデテエールを詳説されてゐる

『都市復興と建築』濱田稔著

相模書房發行

¥23.00

人口の集中傾向より都市の復興を述べそのための建築様式と配置及び資材必要量を考へられてゐる

『氣候と住居』木村幸一郎著

相模書房發行

¥28.00

日本各地を氣候區分しその住居計畫を述べ

『住生活』今和次郎著

相模書房發行

¥16.00

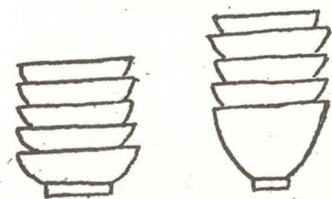
人間生活を休養、社交、事務、生産等に分け各々について啓蒙的に書かれた著

『復興住宅店舗附住宅設計圖集』

左へ、流し、調理台、火場とするか、流しの直ぐ左を火場にして調理台は中央に置かするのが勝手がよい。

★

台所は又、せいぜい狭いのがよい。歩行距離が少なくて過勞しないからである。狭くて用が足りると云ふのが私の理想であるが、それには道具、器具、食器等に就いて検討する必要があると思ふ。二つの洗桶は上部よりも低部の容つたもので二つが重ねられるものを選ぶならば、使用後は重ねて片付けられるから場所を取らなくてよい、鍋もその通りで、数個重ねられるものを選ぶならば鍋棚



重ねた器

の場所は本當に少なくて済む。茶碗、湯呑、皿等と皆然りで、上部の開いた下部の窄んだものを選ぶと、五枚十枚

重ねられるから、従つて場所を取らず、戸棚は小さくて事足りる事になる。上から下迄同じ太さの湯呑や、上部の却つて窄んだ深皿や、手のついたコーヒー茶碗等は總じて場所取りである。斯んな

ものは衣食住不自由なき時の嗜好品であつて不足と闘ひ乍ら國家再建の途上に努力する我等の家庭に於て求むべき品ではない。

道具類に就ては、オープンやアイスクリーム器のやうに近頃減多に使はないのに嵩高で場所塞ぎのものは思ひ切つて台所から追放する。

それから棚であるが、棚即空間の利用は極度になさるべきである。云ふ迄もなく空間の利用が高度であれば、それだけ平面を節約する事が出来、歩行距離が少なくなるからである。棚の一部程よい高さの所には引出しを設けて、箸、しやもじ、布巾、半袋、購入通帳等細々した物を入れるに便利且つ整理しやすい様にする。澤山の棚は全部戸棚にするのが望ましい。塵がかゝらないからである。棚への物の納め方は、眼の高さの所に最も度々使ふ物を入れ、次はその上下の邊、即立つた儘で樂に手の届く範圍のところに。重い物や瓶詰等破れる危険の多いものは一番下部に入れる。背伸びをしなければ届かない所、足繼の要る所と上に行くに従つて、使ふ度数の少いものを入れる。斯う云う風にして行くと、台所はずつと狭くて充分間に合ふから、従つて便利で、氣安く働けて、疲れない斯んな台所が、私は欲しい。

名古屋商工會議所編纂

アルプス社發行 ￥200.00

プランとエレベーションの圖集

C 施 工

1、土木建築工事施工用機械 平野井雷治著
修教社發行 ￥140.00

2、假設工事とエレクション 加中健三著
理工圖書株式會社發行 ￥45.00
假設工事とエレクションの施工法をわかり
易く圖解された現場用好著

D 建 築 史

1、『續成蟲樓隨筆』天沼俊一博士絶筆

明窗書房發行

￥180.00

建築史學者の紀行隨筆

2、『日本古建築圖錄』下卷 藤原義一博士著
星野書店刊 ￥260.00

室町時代以后と追加を合せた寫眞附の學術
的解説書

3、『古塔巡歷』北川桃雄著
東京出版社發行 ￥90.00

各地の古塔を巡歷した隨筆的な紀行文であ
る

4、『蒙古學問寺』長尾雅人著
全國書房發行 ￥150.00

★

私の家は亦、小さいのが良い。小さい程、手数が省けるからである。又資材の乏しい折の時節向きであるからである。しかし小さい家に、間仕切のこせこせしたのは、息がつまる思ひがするから思ひ切つて、大膽に間仕切を少くする。さうすると勢ひ、台所も、食卓も、何處も、此處も、丸見えと云つた家になる。つまり今迄汚い處として隠した場所が人眼につく事になる。これが穢かつたら乞食小屋か犬小屋同然であるから、何處も彼處もきれいなものにしたい。

先日、最近のアメリカの小住宅の圖を見せてもらつたが、それには、居間に台所も、食事する處も、勉強する處も附いて居た。又台所は、それはそれは垢抜けた上等なもので、他の部分よりもむしろ優遇されて居るやうに見受けた。私は羨ましいと思つた。

又私の小住宅は、陽當り、風通し等の天然の恵豊かなものであつて欲しい。南の開けた土地に眞南を向いた小さな家。そして南には廂附の大きな窓があり、東と北には小さい窓。然も北の窓は隙間風の入らぬやうに特別念入りにしてある。西の窓はやゝ大きく、又東や西の窓外には、落葉樹を

植えて夏は緑の日覆にする。と云つた風にしたら、此の小さい家は、自然の恵を豊かに貰へると思ふ。

★

小さくて、極く便利で、綺麗で、さつぱりと垢抜けした家。そして天然の恵を素直に受けた家。斯うな家に、簡素な住み方をしたら、どんなに良いだらう。私は今こんな家に住みたい。又もし私のやうな事を思つて居る方があつたら、その方々にも、斯う云ふ家を提供出来る様になつて欲しいとつくづく希ふ。



薄 鐵 板 平 波 板

ドアーハンガー

鳥羽工業株式會社

大阪市東區南久太郎町四丁目
(御堂筋南御堂前)

特にラマ教のラマ廟を中心に書かれ、著者長年の苦心の跡がみられ文化的價値の高いものである。

『新藥師寺考』毛利久著

河原書店發行 ¥55.00

文献を余すなく考究し、新藥師寺の創建よりの建築美術に言及してゐる力作。

『藤原文化と佛像』米山徳馬著

大八洲出版社發行 ¥65.00

阿彌陀堂建築を學ばんとする人の必要の書

『桂山莊』高桑義生著

堂出版部發行 ¥150.00

『古代農村復原』大場磐雄著

あしかび書房發行 ¥60.00

昭和十八年發見された登呂遺蹟の研究著

『ヒューマニズムの建築』濱田隆一

雄雞社發行 ¥60.00

近代建築の特質と將來日本建築の進むべき方向を機能主義の理念より論じた

『日本靈異記に見ゆる寺院址の研究』

田中重久 史迹と美術180、181、182号

日本靈異記(弘仁時代)中に書かれてゐる主として奈良時代の多くの寺院について未研究のものを發表してゐる。

温環境の測定について

梶 原 三 郎

1

緒 言 採暖をおさへられてしまった寒い冬の職場にもう幾度びを耐えたことか。これで吾々は自然に與へられる温環境に安住してしまつてゐた。他面では労働基準法が五月から實施されて、今年の夏は高温作業場の多くの箇所が違法とされることになるであらう。

こんな次第で今又あらためて温環境の測定の基本について述べることの必要があると考へる。

2

従來の諸測定とその欠陥——(1) 水銀をガラスに封じた溫度計が實用に供されるようになって以來この溫度が暑さ寒さを示すと吾々は習慣付けられて來てゐる。この乾球寒暖計は空氣の濕度を相當正確に示す性能を持つてゐる。しかし人間の寒い暑い感覺の程度とは並行したものではない、これは勿論理論上のことで、實際上では人間は自分の感覺を寒暖計の目もりの上に移してから感じることを習慣的にやつてゐる。

理論が實生活の面に移されて來るのには暑さ寒さが社會問題にならねばならぬ、歴史的にはこんな事情に立ち至つたのは産業革命以來大量製産を目標にした近代工業とそれに伴ふ鑛業とが多くの労働者を造つて、その労働者が社會的な勢力になつてからのことである。

習慣的寒暑のはかりになつてゐた水銀溫度計の批判が始まつたのは労働衛生の分野に於てであつた。特に紡績と炭鑛とがこの検討の現場になつた

人間が體內でMカロリーの熱を發生するとこの熱は刻々に體內に放散されてゐなければならぬ。この體からの熱放散は全く物理的な現象であつて三つの放散の仕方しかない。その一は空氣に對して熱傳導と空氣の對流とで失ふ路(この量をCとする)第二は輻射によつて四圍の物體に熱を送る(この量をRとす)第三は體表面から水を蒸發

させて、水の氣化の潜熱として體から熱を放散する。この量をEとする。體温の一定さが保たれてゐる限り、次の方程式が示す平衡が保たれてゐなければならぬ。

$$M=C+R+E$$

この方程式の右項のうち、空氣の溫度に正比關係にあるのはC(熱傳導と對流)のみである。Rは周圍の物體の表面溫度に比例し、Eは空氣の濕度と氣流の速さに比例する。

水銀溫度計は空氣の溫度を示すが、周圍の物體の溫度にも、空氣の濕度にも氣流の速度にも無關係である。三つの因子のうちの一つにだけしか關係のない示度で人間の問題ときめるのは不合理であると云ふことが、例へば工場鑛山内の高温、高濕の暑さが勞資間で問題になつて來ると、科學は精度を増して來る。こゝでとりあげられたのが濕球溫度計である。

(2) 濕球溫度計は氣象學ではすでに古くから用ひられてゐた。これは水銀溫度計の球を薄い布でつゝみそれを水でぬらしたものである。この布の面から水が蒸發して水銀球に空氣から送られる熱を放散する。それで濕球溫度計の示度は空氣の濕度が飽和に至らぬ限り乾球の示度よりは低い。この溫度計は空氣の溫度と空氣の濕度に關係するから乾球溫度よりは人間の感じに比例した示度を示すはずである、のみならず溫球面からの水の蒸發速度は氣流によつても支配されてゐるし、溫球の布は輻射熱を吸収して熱(溫度)に換るからいよいよ人間の對熱關係に近接した示度を示すはずである。

工場、鑛山の暑い場所では高温、高濕度低風速がしばしば組み合はされてゐるので、其所の暑さの判斷は濕球溫度による方が正しい。又高熱を用ひる工場では高温、低濕が組合はされる(例へば爐の如き)場合もしばしばある。この際にも濕球溫度の方が正しい。勿論この際には溫度示度で

は労働者側には損で資本主側には得になる。

英國の工場法では、この理論によつて、濕球溫度が限度（許される最高溫度）をきめるのに用ひられるようになった。

第一次世界大戰の際、武器生産能率が重視され労働効率を高める必要が感じられた際に再び環境の測定が精度を増すことになった。この時には學問的には風速が主に考へられた。と云ふのは機械的に考へて風速を増加させるのが最も行ひやすい策であるからである。吾々はすでに昔から『ウチワ』を用ひてゐた。

風速のことを考へてゆくといふ問題は水銀溫度計の球があまりにも小さく、この大きさに比して人間の體があまりにも大きいことである。小さい物體程重量に對する表面積の比率が大きくなる、熱は表面から失はれてゆくものであるから測定器の大小が問題になる。そこで溫度計の球を大きくする試みがとられた。それと同時に空氣の溫度と云ふ習慣からぬけ出て、新しく空氣の持つてゐる冷却能力を測ることが考へられるようになった。物理學的に空氣の溫度攝氏度と云ふよりは空氣の冷却力を平方糎につき毎秒何カロリーと表はす方が美しくもある。こゝで生れ出たのがレオナルドヒルのカタ溫度計である、この名稱は不合理なものであるが本人がそう名づけたのでいたし方がない。

(3) カタ溫度計 これは鶏卵大よりちよつと小さい球をもつた、アルコール寒暖計である。但し常溫ではアルコールは毛管部位には登つてゐない。溫度目よりは攝氏三十六度と三七度の二箇所にあるだけ、毛管はそれよりも長くて上端は小さな球になつて終つてゐる。この球の部分に四十度Cの湯の中につけるとアルコールは三十六度、三七度の目もりを越えて上部の球にすこしたまるぐらゐに登る。これを湯からとり出し、水をぬぐつて、冷却力を測る場所に靜置して冷えてゆくのをまつ、アルコールが三七度をすぎる時にストップウォッチを走らせ、三十六度をすぎる時に止める。即ちアルコールとガラス球とから熱が空氣に移つて、其の溫度が攝氏一度だけ下るに要した時間を測る。球の中にあるアルコールの量がわかつてゐれば一度溫度が下るのに失はれねばならぬ熱量（カロリー）はわかる。この熱量が失はれる表面積も一箇の測定器では不變だからこの廣さで熱量を除いた數は一定である。これをFとすればその單位は平方糎あたり何カロリーになる、このFを今測つた秒數で除すと、一平方糎あたり毎秒何カロリーと云ふ冷却速度が出る。これを空氣の冷却力とする。一時はこれでも用ひられたが、冷却力と云ふ觀念の新鮮しさが溫度と云ふ習慣的な見方にかゝることを大衆がつとめないのと、この器械の大きな

欠點即ちFがある程度以下（二二度C）では變つてくるためにすたれて來た。

(4) ヤグラーの效果溫度—カタ冷却率が英國で考へられたのに對して、これはアメリカで考へられた。水銀溫度計の溫度は物理學的には一應正確な讀みである。空氣の濕度も物理學的には正確に測られる。風速も又秒速何米で正確に測ることが出来る。いづれも純粹な物理學的數値である、この獨立した値を混同した一つの測定値につめこむよりは、むしろ純粹な獨立した數値を得てこの組合せを人間の感覺で評價するのが最も基本的だと思へる。その上に、快感をもたらし技術の基礎としてもこの方がより有効で便利である。この考へにそつて提出されたのがヤグラーの效果濕度である。即ち氣溫、氣濕、氣流のいろいろな組合せを具現する室を並べて、そこに澤山の人間を順次入らせて、（理論上は入室時間一時間半を要する、人體の熱容量が大きいから）そこで受けた實感を投票させる、所謂 Comfort Vote で組合せの感覺評價をさせる。この評價の結果を溫度の讀みにするためには、人體からの熱放散の路を熱傳導と對流のみにする即ち氣濕を一〇〇% 風速不感程度にして、溫度を投票させてきめる。この投票の結果はなかなか一致しないために快感點はみつからないで快感帶がきまつたのである。この測定はアメリカの空氣條件工業の基礎になつて大いに役立つた。しかし人間の主觀が入つてゐる點が大きい欠點である。尙ほこの溫度では輻射熱が全く考へられてゐない點が一つの大きい欠點である。

(5) ヴェルノンの球溫度計 (Vernon globe thermometer) 工場内の暑さが空氣の溫度ではなくてそこにある高溫物體であることはすこぶる多いことである。爐やインゴットは輻射能のある高溫物體である。ボイラーや高溫の液體を容れたタンクも又そうである。表面の輻射能を低くすればよいのだがそれもよこれて來ると輻射能が増して來る。工場の暑さは輻射の暑さと云つてよい場合がしばしばある。

暖房の手段にしても空氣の溫度を高くするものばかりではない。むしろ高溫物體からの輻射を用ひるものが多い。壁につけた暖爐、日本の火鉢もそうである。これは暖房でなくて廣い意味でのヒータボツコである。地球上の溫さは太陽の輻射で成立してゐる。輻射は空氣の溫度よりも重要である、室内でもそうである。これでパネルヒーティングが生れた。空氣の清淨さの點から云つても輻射暖房の方なら安心である。

こんなことからヴェルメンのグローブ溫度計が認められるようになった。これは直徑一五糎の薄銅板で出來た球の中に、水銀溫度計を入れてその球をグローブの中心においたものである、銅球の

面は黒くぬる、この形式の計器は一八八七年に英國の物理學者 Aitren が用ひてゐる。球が大きいのは、熱傳導係數特に風速と關連しての係數が小さい球では人體のそれからかけ離れるからである。理論的にもつと大きくてよいのである。

グローブ溫度計はグローブの表面が輻射熱線を吸収して溫度を高めそれを中の空氣に傳導して、水銀溫度計の示度との間に輻射に比例した差を示す。

日本の夏の午後三時頃には私の記録では最高四十二度Cになつたことがある。大學の最も風のよく入る室で八月の午後には三十二度位である。又工場内の記録では六十二度C位のものがある。

英國ではこの溫度計の示度をヤグラーの效果溫度に組合せる『ノモグラム』を作つてゐる。

以上いろいろと考案されたがどこまでも人間の主觀をはらひのけることには成功してゐない。たが主觀的な感覺表現を連續した數値にかへることも考案されてゐる。所謂溫感覺尺度をこしらへるのである。

投票の統計的整理の時に溫感覺表現を數値尺度(表参照)で置き換へると一應感覺表現を連續させてやゝこまかに判定することが出来る。又ある溫環境の測定法と溫感覺との相關々係を示す迴歸曲線を作ることも出来るしそれから相關係數を算出することも出来る。英國のベツトフォードの成績によると、

溫感覺	數値尺度
あまりにも温かすぎる(暑い)	1
温かすぎる	2
氣持よく温い	3
快感	4
氣持よく涼しい	5
涼し過ぎる	6
あまりにも涼し過ぎる(寒い)	7

感覺投票と……………との相關係數

空氣溫度	-0.48±0.01
カタ冷却率	+0.43±0.01
効果溫度	-0.48±0.01
グローブ溫度	-0.51±0.01

負は逆の正は正の相關々係を示す、最もよい溫環境の測定値がみつければ相關係數は1になるはずである。

3

溫環境の測定から主觀を除く

$M=C+R+E$ ……………快感 ($S=0$ と考へる)

$M < C+R+E$

($M=C+R+E-S$)……………寒い

$M > C+R+E$

($M=C+R+E+S$)……………暑い

2の(1)で述べた方程式をもとにしてみると右のような感覺判斷が出て来る、この方程式をもとにしたならば溫環境の測定から主觀を追ひ出すことが出来るはずである。この線にそつてアメリカの Winslow, Gagge, Herrington そして Hardy Du Bois 等が仕事をやつてゐる。

Winslow Gagge はMの量を食物を酸化するに用ひられる酸素の量から等出し、($C+R$)を直接に測定し、Eを體重の減少から算出した。この測定の仕方を部分的熱量測定 Partial Calorimetry と云ふ。方程式中Sは人體に貯藏される熱量の變化で寒い時には-Sとなり、暑い時には+Sになる、Sが0の時には熱平衡が保たれてゐる、寒い時に手足が冷えるのは體に貯められてゐた熱がとられるからで、生命により重要な機管の溫度をこうして保持する。これと逆の場合には體溫が上昇する。

物理學的に方程式右項を溫度に關連させると次のようになる。

$$R+C=K(T_s-T_w)+K_c(T_s-T_a) \dots\dots\dots (1)$$

T_s =身體表面の平均溫度

T_w =壁面の平均輻射溫度

T_a =空氣の溫度

$$R+C=K_r(T_s-T_w)+K_c(T_s-T_a) \dots\dots\dots (2)$$

(1)をこう書きかへることが出来る

$$\text{Newtonの冷却法則は } R+C=K_o(T_s-T_o) \dots\dots\dots (3)$$

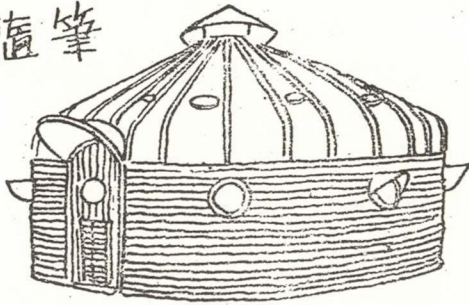
T_o をOperative Temperature (作用溫度) of The environment と云ふ、 K_o は複合冷却係數である

(2)と(3)を對比してみると

$$T_o = \frac{K_r T_w + K_c T_a}{K_r + K_c} \text{ であり } K_o = K_r + K_c \text{ である。}$$

人體の K_r (輻射放熱係數) K_c (傳導放熱係數)を實驗的に求めることが出来る。いろいろな體型(ふとつた人、やせた人)でこれを澤山測定すれば平均的な値が得られる。この平均的な兩放熱係數を用ひて T_o を算出したならばこの溫度は基本的な溫環境の溫度表現になる。これで主觀を消すことが出来る。今の所 T_o はなかなか上手に算出された適切な溫環境の表現であると認められてゐる。風速を算入してこの冷却力をも T_o の尺度から減じることが出来る。又Eに對する氣溫の影響も算入することが考案されてゐる。しかしその敘述は長くなるので又の機會をまつ。

隨筆



住宅問題と民主主義

稻葉房藏

終戦後、いちばん問題となつたのは衣食住の解決であり、2年半の歳月を経過した現在でも、何よりも未解決のまゝでほりだされているのも衣食住の事である。衣食の二つの問題はさておき、住宅問題を取りあげてみると、敗戦直後の虚脱からようやく醒めて何らかの努力は人達によつて夫々なされてゐる。

が私からみればその建設の速度が遅々たるのは必ずしも心配ではないが、その方向が誤つてはいないかをいちばんおそれるのである。私たちの之からなす事は過去の復原ではなくて新らしき建設である筈である。この際住宅問題の民主的解決が眞剣に、素朴に、根本的に考へられねばならない。

これまで住宅の量の問題は政治家が考へ、質の問題は建築技術者が研究工夫するといふ分業が慣習的に行はれ、住宅の大量生産、工場生産が何度となく試みられたが實例が示すごとくその何れもが失敗の連続であつた。

之等の仕事を私たち建築にすぶる素人がみてもすぐそれと判るような弱点が種々あるのであるがこの人たちはそれに氣づかすにか或は無視してやつつけてしまつてゐるように思へる。

建築施工の請負制、規格の不統一、手工業的手法の占める比率の大、資材供給面の不手際、大量運送の困難、住宅工場生産化の限界性、労務者の

不熟練等數へあげればきりが無い。

新國家の建設といふ、この重要な時期に當つて20年前に論議された住宅問題が再び出発点から検討されなければならない状態である。

上記のような原因はいろいろ、たくさんあることだろうが、そのもつとも基本的なもの一つとして私は次の点を強調したい。即ち住宅問題の解決に當つた建築技術者達はほんとうの民衆の住に對する欲求を知らなさすぎたのではないかといふ点である。非社會的、封建的、因習的、孤立的、公式的といったものにとらはれたあたまで手で住宅が建てられていつたらたまつたものではない。

特に住宅問題の解決を委ねられてゐる官廳や半官半民の團體がこの弊害を及ぼしたものと考へられる。

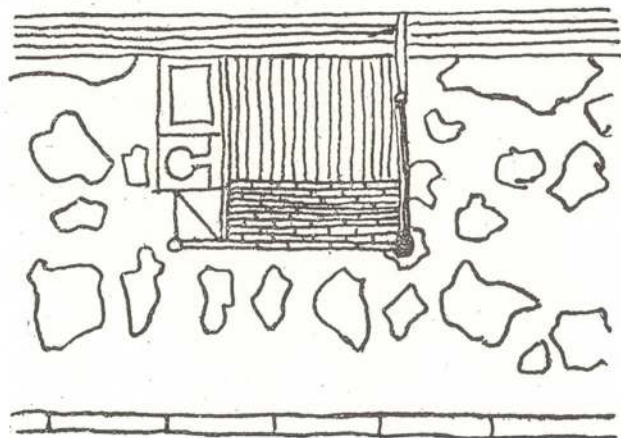
住宅問題の民主化とは解放的、社會的な住生活の營みであるといふこの太字で書かれた一行には絶対に間違ひのない所であるが、そうかといつてそれが直に安易な共同炊事、共同便所式の施設を造る事に直結するのも早急すぎるのである。

正直なところ民衆は之等の社會的、公共的施設や、生活を受けいれるところまで進んで来ていない。これまでのわが國の下積みにされて來た民衆の立ちおくれと、之等施設の幼稚な實驗的な解決が災ひして、眞の民衆の正しい欲求を歪めてしまつてゐるのである。この民衆の自己矛盾を解明して、理想的な社會生活へと導く事が、建築技術者の第一になさるべきことだと思ふ。

事實私たちの住んでいる家は、電氣水道設備を除いて50年前、100年前と何ら變つてはいないし寧ろ劣つてゐる点もあるのではなからうか。住に對する民衆の欲求は昔と今と變らず、たえず求めつづけられてゐるにもかゝわらず依然として不満足なまゝ残されてゐる。科學の進歩に應じてそれが果してどれだけ埋められたであらうか考へてみれば疑問である。

以上甚だ言葉が足りないのであるが門外漢の苦言として建築技術者の方に呈したい。

住宅設備



伊藤正文

(1)

庭に飾られてゐたと思はれる足の折れた、ブロンスの鶴や、片手のもげた二宮尊徳翁の像と一處に、火鉢、放熱器、エレヴェーターの部分品、さては、折曲つた赤さび色のパイプなどが、ゴチャゴチャに積上げられて、雨凧しになつてゐたつい二三年前の情景が、眼に浮んでくる。

金屬回收で、出された放熱器などは、使用中は冬になると、毎日熱したり冷えたりしてゐたものだから、兵器などの用には立たず、折角集つたとはいへ、使ひ途のないまゝに錆色の山を作つたに過ぎなかつたのであらう。スクラップも、バーデンスクラップでないと、ほんたうの使用に耐えるものにはならないのださうである。こんな運命に置かれた建築設備の部分品の量は、さぞかし夥しいものであつたろうと思ふ。歐米の都市にくらべて、はるかに貧しい設備だつたとはいへ、建物の罹災が何にかゝわらず、早くから設備が撤去さ

れてしまつてゐたのだから、今となつては日本の建築設備は、全く無いも同様の有様といつてよい。

まして、住宅では、電気や瓦斯の一應の設備は残されてゐても、活用は出来ず、便所や台所や、浴室の設備は、損傷を補習することもなしに、放置されてゐる。アメリカを除く他の交戦國だつた國々でも、多分似たやうな情態だらうが、これが、今後どんな風に設備し直されてゆくことだらうか。

もともと、設備の機械的なことは、アメリカが、最も進歩してゐるらしいから、大勢としては、これに見習つてゆくとして、生活様式の違ひや、經濟の程度の差から、從來よりも、もつと合理的で經濟な方法が案出されて行くことにもならうと思ふ。日本でも『冬は運動すれば温かくなる、夏は裸にな

れ』といった工合の生活は、もう過去のことにしたたいし、個人生活の向上によつて、社會の衛生状態、個人の健康が保たれるやうにならなければなるまい。前大戰後に、歐米の新建築家が集つて、國際新建築會議を開き、住宅の問題を討議した時に、充分な健康保持の設備といふ點に重要性が認められ、その設備方法に伴つて、新しい機能的な建築様式が生れたのであつたが、今も又、衛生上危惧のないやうに、設備する必要に迫られて來たと考へてよからう。

(2)

建物よりも、もつと多くを失はれてしまつてゐる設備の再建は、なかなか容易ではあるまい。しかも、バラツク建の住宅しか得難い今日にあつて、次の計畫に萬全の考慮を拂つて置きたいものである。住宅としては、所謂家屋病といはれてゐ

る各種の傳染病を豫防する立前から、必要限度の
方注と處置とが、即刻にも必要なものではあるまい
か。住宅の保健上の條件としては、保温、防濕、
換氣、採光、照明、便所、浴室、台所等の諸設備
があるが、就中、大切なことは、暖房、便所の設
備などで、これも建築だけの取扱いで解決する程
度のこともあるし、機械力を必要とする設備もある。
今迄の考へ方でゆくと、冬は火鉢か炬燵にあ
たればよし、便所には竈を埋めて汲取式でも用は
足りる。しかし、新しいジェネレーションが、疊
敷の室よりも、板の間の生活に心索かれるやうな
らば、筒形の瀬戸の火鉢で手を温めるのでは、生
活がものうく、部屋を温めるに要する木炭の消費
も莫大となり、粗造家屋では、温度の上昇も覺つ
かないために、幼児の風邪などにも心配があらう。
熱のロツスといふことを經濟の上から見ると、ま
るでこれでは知慧が無き過ぎることになりはすま
いか。

コンクリート建のアパートででもあれば、スチ
ームや温水の暖房装置を設ける機會も多くならう
が、今の處一般的にいへば、兎も角經濟的であつ
て、厨房用の熱源や、浴室の熱源からの餘熱を、
冬の保温用に使ふといつた工合の設備を工夫した
いものだと思ふ。之が住宅設備の重要な課題にな
る。

便所なども、從來の汲取式では、清潔感に乏し
いのみでなく、チブスとか赤痢の患者が発生する
時を思ふと、小住宅の集落は忽ちにして危険にさ
らされるわけである。いくら都市衛生や、社會衛
生をやかましくいつても、足許から、個人の健康
が、おびやかされるやうでは心もとない。といつて
全都市の便所を淨化装置にすることも出来ない相
談であるとする、目標は淨化装置に置いても、
取あえず汲取式の改良、つまり改良便所の工夫が
要る。内務省式（厚生省式）とか大正式もよいが
すでに、その欠點があれば、更に之等を改良され

て然るべきであらう。こゝにも、一つの課題があ
る。實は、設備としての課題は、まことに多いが、
餘白も少いので、こゝでは保温の問題について、
もう少し、立入つて見よう思ふ。

(3)

元來、暖冷房と換氣とは、空氣調整といふ一つ
の技術的方法にまとめて考へられて來たので、暖
房法の解決は、同時に換氣法の満足されることを
意味するものであつた。つまり室内の保温は、空
氣の温度を調節することにあつたわけである。

ところが、此世紀に入つてから、熱輻射の研究
が、非常に進歩したために、暖房法として、普通
寒暖計で測つてゐる氣温とは別個に、人體の表面
と、周圍の物體の表面温度との間に作用する、熱
の輻射によつて、保温することが初まつたのであ
る。これが工業化されたのは僅々十數年來のこと
で、所謂“Panel Heating” 低溫輻射暖房法といふ
方法なのである。

此方法は、溫湯の流れてゐるパイプを、天井と
か、床とか、時には壁に埋めて配置し、室の周壁
を温める。無論、ボイラーはもとより、相當長い
管を必要とするわけで、小住宅などには直にこの
方法を適用するわけには行かない、第一經濟が
許さないが、この理論の應用から、簡易な採暖設
備がいくらか工夫出来ることだらうと思ふのであ
る。これが家庭の經濟にもなるならば、愈々面白
からう。こんな考から、尙少く熱輻射利用の暖
房についてのべて見ようと思ふ。

人間の身體から、傳導や、蒸發の形式と並んで、
輻射によつて、生理的な餘剩温を放出するのを、
衛生學では『射温』と呼んでゐるが、この射温が、
著るしく増加すると、寒さを感じる程度も増して
來るのは當然である。この現象は、身體の附近の
氣温と、周圍にある物體の表面の温度が、身體の

表面温度に比べて低い時にあらはれるのである。

しかも、その温度差のひどい度合に比例して、射温もはげしくなる。極端な例でいふと、氷室の中へ、裸體で入つてゐるやうな場合はその射温が大きい筈である。ところが、室内の空氣、壁、机や椅子などの表面温度が、攝氏20度内外になるやうな場合は、射温は止つて、氣温が相當に下つてさへも、それには氣がつかない程、寒さが身體に感じられない。又反對に日光の直射や、赤くやけたストーブに當ると、身體の方が、射温をうけて、温められる理である。何のことはない日向ボツコを例に考へてもらへばよい。

生理的に射温の研究が、進められ出したのは、前世紀來のことで、20世紀に入つて、色々の實驗が行はれて、急に輻射熱利用が進められるやうになつたのである。さうして、身體の表面からの輻射は、輻射線内の近赤外線部、特にその波長が9ミクロン(10-7Cw)の附近で、最大になることが證明され、従つて、窓硝子に、この身體の輻射線があたると、これを透過しないで、その表面を温め、更に熱は傳導の形で、硝子の反對側に出て、再び輻射線となつて逸出することになることや、空氣はこれを殆んど吸収しないで透過することなどがわかつて來た。だから日向ボツコをやる日光室の状態や、裸體で滑る雪山のスキーの場合など思ひ比べて見ると實感が出易い道理である。又、熱の輻射は、光線と全く同じ働き方で作用することも、1931年ルブネル氏によつて證明されたところである。冬の寒い日に、室内にゐる人の體温は天井と、冷い窓硝子に輻射熱としての大部分を奪はれてゐることもわかつた。こんな事情から、射温の量は、その發する面の大きさと、温度とに比例し、天井や床の廣い面を低温度に保つと、小さい高温の面と同様の熱量を放つことになる理から、1906年バーカー氏は、温水パイプを壁の中に埋めて、暖房の實驗をやつたことがある。これが

そもその初まりで廣い天井に、温水パイプを、蛇行させて配置すると、その表面の温度が華氏の100度内外で、下に居る人々は温かであることとなる。

この方法によると、氣温も低く、冬の風のない日中位ならば、窓を開放しても、差して寒さを感じない。それに天井から下向の輻射をうけても、頭だけ熱せられて足が冷いやうなことは起らないといふ。この點は蒸氣暖房などよりははるかに、快適だといはれてゐる。

これを局部的にやるには、比較的小さい面を、稍々高温に保たせるとよい。

ボーダーヒーティングといつて、壁下部の巾木等を華氏140度位まで熱すれば、それでよいことになる。ところが、和風住宅などでは、障子紙の輻射熱透過率が大きいので、むしろ小さい面を、少しく高温に保つ方法の方が適するだらう。洋風の居間でも、スチーム暖房のやな對流による方法だと、氣温だけ早く昇り、壁がなかなか温められないので、いつまでもぞくぞくする。それを丁度工合よくする程、壁を温めるには、氣温が必要以上に高められるといふ不經濟と不合理がある。だから、これも低温の輻射暖房がよいだらうといはれてゐる。

朝鮮のオンドルや、滿洲方面の尤なども、一種の輻射暖房法だが、目貼りした居室でもあるし、身體に密接した床を温めるのだから、特に低温でよい筈だ。英國の小學校の教室などは、床の表面を70度(華氏)に保たせればよいといふことである。それに燃料に乏しい吾國では、北海道から北陸へかけての採暖法に、色々と暗示されるものがひそんでゐるやうである。

又、英國では、電氣パネルが考案され、細い電線を、強い石綿紙に簡單に取付けて、電氣を通するやうにし、壁紙同様に抜ひ、ペンキを塗るのもよいといふ。高温の電氣パネルは、大さ25インチ

に18インチの表面を、約500度(華氏)に熱する。これは、繪の額縁のやうにして、室壁などにかけるのである。

ロシアのペーチカや、ドイツのカツヘル等は、同様に、輻射熱による方法の一つであるが、これは、煉瓦積の厚壁の中をうねつてゐる煙道があつて、その煙の熱が、壁を温め、表面から輻射する装置である。だから、古代ローマのハイポコーストから、朝鮮のオンドルに到るまで、經驗的には輻射熱を利用した例は、かなりに多いことになる。とすれば、この採暖法も突然に現はれたものではなく、最近に理論がわかつた半面に、古い經驗もあることになる。満洲の炕や、オンドルのやうに台所の煮焚の余熱をすべて暖房に利用するやうにこの方法の簡易なものが、もつと考案される可能性も、また充分見込があらう。

(4)

住宅設備の課題として、こゝには輻射暖房を一つの示唆としてお話したに過ぎないけれども、便所や台所や、浴室の設備を結びつけて解決するやうにすれば、貧しい日本の住居の福音をもたらすことになるらう。

嘗て、北海道大學に中谷教授を訪れ、同氏考案の防寒家屋である同氏宅を拜見したが、矢張、今

のべたやうなペーチカ風の採暖法を 家庭のプランにうまく利用されてゐるのに感心したことであつた。建築家や、設備専門家の他の人々が、特にかういふ方面に興味をもち、研究されることも、住宅問題の技術的な解決を促進する機運をつくることであらうと思ふ。従來は、設備の仕事は、『附帯工事』などといつてほんの建築のつけたりにか扱はすにゐたことが、今日の貧しい情態を來たしてゐる原因にもなる。此頃は、かういふ設備全般を、『管工事』といひ、建築の主体工事と同じ程度の重要さに扱はれてゐる。人体にたとへると、血管や神経系統のやうな役割を果すことなので、建築、ことに住宅としての機能を充分にするには量よりも質として、管工事の完全であることが要望されなければならないと思つてゐる。

便所の問題や、台所の設備や、照明のことを考へると、日本人の住宅設備は、これからが、ほんたうのふり出しだらう。アメリカなどでは、住宅設備の科學を、Domestic Engineering として一般人、ことに、家庭婦人の教養にもなつてゐるといふが、日本でも、一つの生活學として扱つては、どんなものであらうか。

又、住宅の課題としても、量の解決を急ぐ一方に、社會衛生の面からも、設備工學の課題が、山積してゐることに、大方の注意を向けてほしいものである。

(1948.2.11)

大建産業株式會社大阪支店建材係

大阪市東區本町二丁目 電話

北濱 1190-94

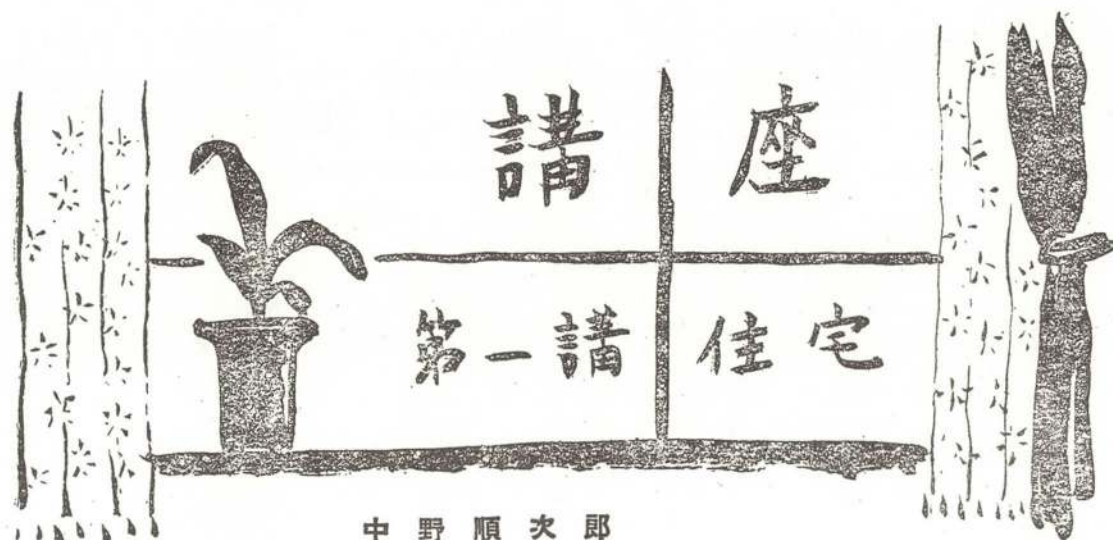
新町 3112-3118

3268-3272

“全國的ニルートヲ持ツテオリマス”

取扱種目

1. アスファルト製品一切、ルーピング、砂付ルーピング、ターフェルト
2. 外装用材、テックス、木毛セメント板、ベニヤ板、フローリング
3. 冷凍關係、炭化コルク、岩綿關係ノ外工事御相談
4. ソノ他、建築用金物一切



中野 順次郎

講座をはじめるに當つて

建築について種々なことを取りあげてお話しを進めてみたいと思います。建築學の解説をするのでなく其時に選んだ適當な題目で多角的な話しを試みる積りです。

順序として、最初の話題は筆者の方で準備しましたが、將來は讀者の方々から提供して頂けるやうに希望してゐます。或は質問の形式で、時には研究の意味で、廣く御希望なり注文を寄せられることを期待してゐます。

この立前から時々筆者も交代してみたいと考へてゐます。

× × ×

住める家は住める土地に

欲を云へば、交通が便利で環境がよく、災害に安全で施設の完備した健康地がよいといふことになります。これは望むことが無理だと思ひます。住みたいとか、住ひやすいとかの條件から一步退いて『住める土地』の程度を考へて置く必要があると思ひます。

この程度といふのは私共が住ひに對する最低條件からくる當然の要求のことで生きるための權利と考へて差支へないものでありましょう。

それは充分の光と充分な空氣それに伴ふ土地の保健上必要とする最低の條件のことゝ万一災害のあつた時避け得られる必要條件のことでなければなりません。

ところで今私共はこのやうな住める土地に住んでゐると云へるでせうか。止むを得ない家の不足のために『住める土地と家』を選ぶ自由をもたないのが現状なのであります。

問題の解決はこれを將來の努力にまたなければなりません、併し惜しいと思ふのは今日までに出來た家がこの條件に落第してゐることで、この点が極めて心配であります。

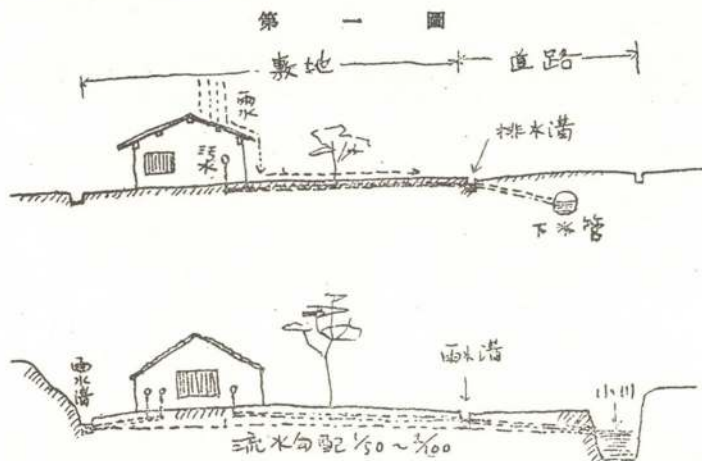
過去に於て優秀な日本建築は確かにありましたが亦一面最も大切な住宅建築になるとその大部分が極めて非科學的で不合理なものであつたことを認めざるを得ません。

これからの住宅に於て、私共はせめてこの最低最少の必要條件を検討してみ、力強く實現したいものと思ひます。

排水の悪いところは駄目

台所、浴室、洗濯場等から出る汚水とか、庭に溜つた雨水等を他所へ流して速かに処理出来る敷地かどうか問題になります。

従来大抵の都市には道路の下に下水管が埋めてあつて、この中へ流しきへすればあとは自然に下水処理場へ導かれるやうに出来てゐる筈ですが戦災都市ではこの設備の破壊されたまゝに放置されてゐるところが可成あるかと思ひます。



亦この設備の無いところならば近くの池か小川等に放水する以外に方法が無いわけです。

何れにしてもこの排水が出来る土地でないと宅地にすることは出来ません。(第一圖参照)

ところが家の敷地が低くて小川や池に流しても汚水が逆流するやうな土地がよくあるのに、こゝにも住宅の建てゝある場合が多いのは困つたものであります。

こんな土地に、假りに自分の宅地だけ盛土を試みたところで周りの

土地が汚水に充ちてゐるのですから何んの効果もありせん。

斯様にして排水が悪ければあらゆる不衛生の原因となりますから、こゝに住ふことが不可能になるのは當然です。

若し辛ふじて汚水を処理出来たとしても、土地が低ければ常に濕土の上に住むことゝなりますから自然濕り勝ちの空氣の中に住ふといふことになります。その結果夏は蒸し暑く、冬は濕冷といふ極めて悪い空氣條件となつて参ります。物品の保存に悪く、家の腐朽も早いのは當然となりませう。

好ましい土地の形は

土地の形を大別すると東西に長方形と南北に長い長方形となりますが、何れの形が便利でせうか。

これは土地の廣さによつて考へ方が變つて来る筈です。つまり廣い土地の場合には南北方向の余裕が相當にあるので東西方向の長方形が便利ですが、狭い土地ですとどうしても南北に長い形の方が有利です。

それは住宅に充分の太陽光線を受けられるやうにすることが必要條件ですから南北の方向に余裕を欲しくなる理屈です。

ところが土地が廣くなると増築とか菜園とかを設ける都合からみて東西に長い方が便利になるのは當然でせう。大ざつばにみて 100 坪までは南北方向に長い形がよいと思ひます。(第二圖参照)

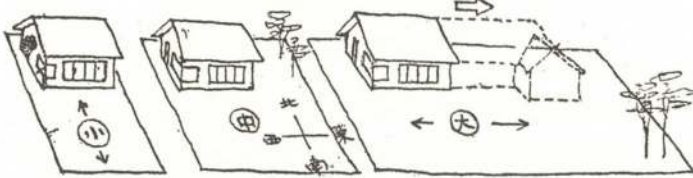
道路と敷地の關係は

地震とか火災の場合に直に避難出来るために道路は土地をはさんで兩側にあるのが理想的です。この場合には一つが廣い交通路で他方は豫備の副路であればよいのは當然です。

併し小さい土地でこの條件を求めることは一般に無理ですから普通は片側道路の場合を考へなければなりません。

この場合敷地のどちらに道路のあるのがよいかが問題になります。これは間取との關係から定めるので

第 二 圖



すが、小さい住宅では北側に出入口があると能率のよい間取が得られるので北側に道路のある土地が便利となります。次は東か西にある場合で、南側の片側道路は一般に有効ではありません。(第三圖参照)

住ひは合理的に變りつゝある

封建的な住形式の家が戦災で壊かれ、そのあとに新しい時代の家を建てる機会を賢明に捉へたいと思います。都市に住む者の大部分がこれを考へてゐるであります。

新しい住ひはどの方向に向つて解決されやうとしてゐるか、これは經濟的にも科學的にもどしどし合理化されやうとしてゐます。

室の廣いことよりも完備した設備を求め、申譯ばかりの専用地よりも豊富な空氣と光とを保證される充分な土地を共同で相共に求める方向へ動いてゐます。

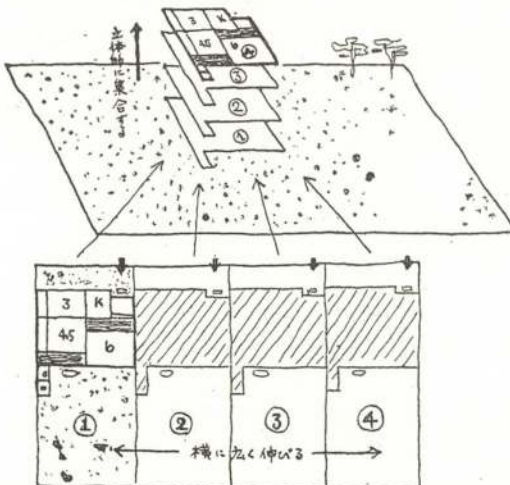
(第四圖参照)

經濟的には、こつこつと一棟毎に製造する無駄を省いて多量生産で優良な部分品を製造し、これを好む形

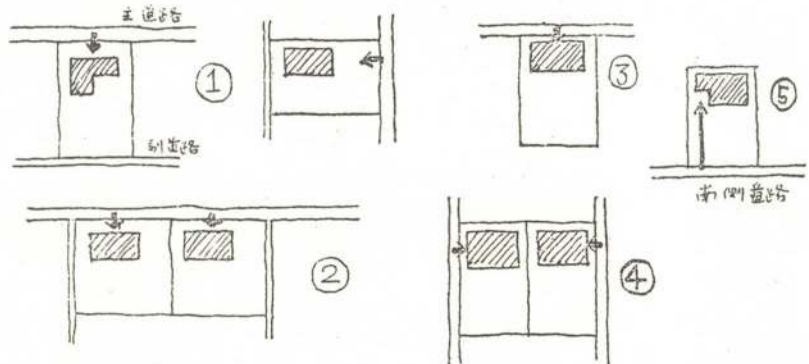
に組立てられるやうになるのが當然であります。

従つて都市の中心部には不燃性の集合家屋が立体的に組立てられるでせうし、郊外の土地に余裕のあるところでは、優秀な部分品を選んで思ひ思ひの獨立小住宅が出来るのが自然のなり行きだと思ひます。何れの場合にも室内は科學的に設備されて、文化的に満足すべき生活の營みが可能でなければなりません。

第 四 圖



第 三 圖



家の向は南面が無難となる

住宅では中心となる居室(居間、寢室、茶の間等)がどの方向に向いてゐるかによつて家の向きが定まるのですが、これは採光と、通風の点で最も都合のよい方向に向けることになります。

先づ太陽光線の関係では南向きが最も有効ですが、この理由は南向きですと、冬は低い太陽光線が充分に室内に射し、夏になると太陽が高くなるので南側の窓は日影になるから都合がよいためです。殊に冬の場合南側の室は北側の部分に比べて温度が $2^{\circ}\text{C}\sim 3^{\circ}\text{C}$ 位高く極めて暖い室となるのもわかります。

ところが東側とか西側は夏の午前、又は午後の直射が室内深くさして非常に暑い上に冬は殆んど太陽の直

射を受けられないといふ不都合が起るわけです。

斯様なわけで南向きの家は日光の点から好都合となります。(第五圖参照)

風向と家の向はどうなるか

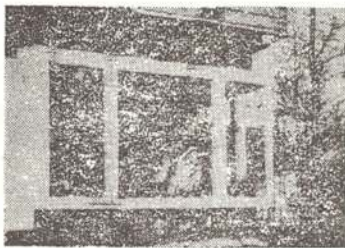
通風は夏の涼風を如何に取入れるかで定めるのですが、これは土地によつて涼風の方が異なるので一様に定めることが出来なくなつて來ます。

例を東京にとると七月、八月の平均風向が東南風となつてゐますが、大阪では殆ど西風となつてゐるのです。従つて東京方面では夏東南方向の風を取入れやすいやうに、大阪方面では西風を取入れられるやうに工夫することが望ましいことになります。

こうなると日光の關係と一致しないのが困ることになつてまいりませう。こゝで検討しなければならないことは家の向きを其まゝにして置いて、涼風を取入れる方法はないかとの向きとか、家の外形をL字型にするとかであります。(第六圖参照)

こゝで検討しなければならないことは家の向きを其まゝにして置いて、涼風を取入れる方法はないかとの向きとか、家の外形をL字型にするとかであります。(第六圖参照)

第 六 圖



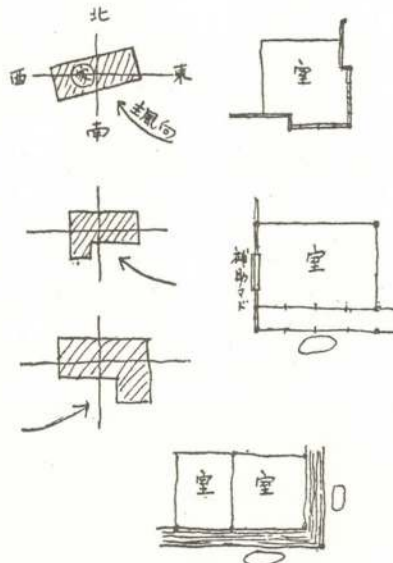
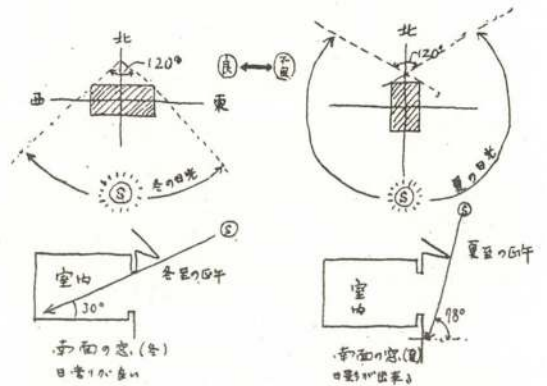
いふことです。そうなると問題は居室の窓が單に南面の一方ばかりでなく東側にも亦西側にも必要になるといふことです。廻り廊下式の椽側が好まれるのはこの解決の一つとみるべきでもありませうか。併し方法は他にもある筈です例へば僅かに東に向きを變へた家ることが出来るやうになります。

この場合道路との關係も考へてみなければなりません第七圖のやうな段階が考へられます。

家と家との間隔はどうして定めるか

敷地の周りが道路や空地の場合は問題にならないのですが、隣接地は原則として他の建物や塀等が出来るものと豫想する場合が多いのでこの問題が起つてまいります。

第 五 圖



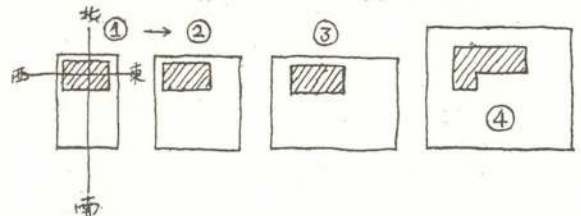
家はどんな位置にするか

土地に充分の餘裕がある場合はよいとして、普通僅かな敷地を有効に使はなければなりませんので、どんな位置にするか研究する必要があります。

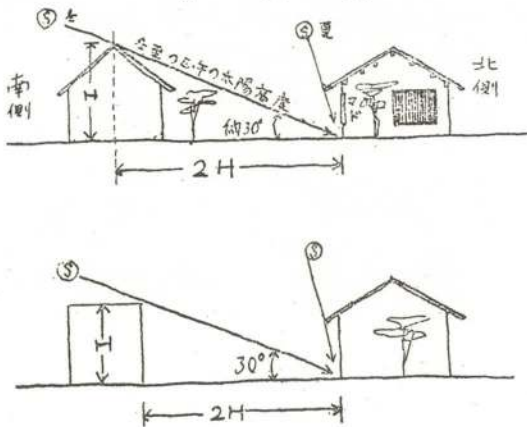
狭い敷地の場合は南北方向の土地を求めたと同じ考へで家の位置は自然北側に片よせて建てなければなりません。

廣い敷地になると條件が變りますから東側か西側に餘裕を取

第 七 圖



第 八 圖



くも三時間以上日光を受けられるやうに工夫するためには前方の建物の高さの二倍以上の距離があればよいことになります。この計算は東京、大阪の大體北緯35°を規準にして割り出したのですからそれよりも緯度の高いところはもつと廣く、亦緯度の低いところはそれより短くても差支へないことになります。

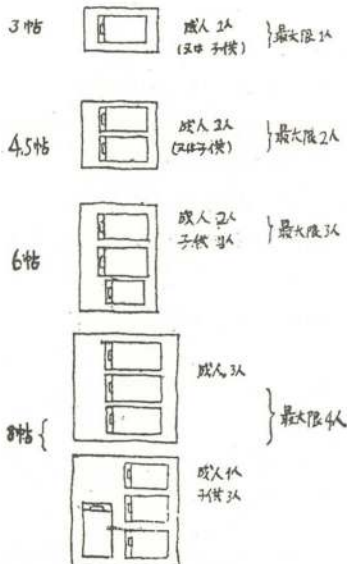
(第八圖参照)

第八圖は土地の高低が無い場合ですから南に低いところは2Hよりも短く、逆の地形では更に廣く定める必要があります。

家族人數と居室の最少限度は

家の廣さを定めるには先づ居室の廣さがどれだけ要るかを考へ、その他に通路、台所、便所、浴場、物入等の部分を加へて全體の廣さが大凡定ることになります。亦居室の廣さは家族の人數や男女、子供、成年者等の事情から割り出すのが合理的の方法となつてまいります。

第 九 圖



先づ問題を簡單にするためにある家族人數に對して最少限の居室はどれだけあればよいものかを考へてみることに致しませう。

ところが居室を最大限に使ふ時はどんな場合かと申しますと、それは夜分寢室として使用する場合を考へてみなければなりません。今一つ室の廣さの段階ですが無暗に17疊とか19.5疊とかの廣い一室にまとめることは出来ませんので、寢室となると男女別、年令別或は建物の組立からみても適當の大きさの室に分割する必要が起るのは當然です。この意味から室を分けて3帖、4.5帖、6帖、8帖の四種類について最大限の使用人數を調べてみますと第九圖のやうになります。

このやうな割合で家族人數に應じた最少限の室が考へられますが、これをそのまゝ居室の廣さとして定めますと無理が出来ます。

それは成人の男子と女子は別々の寢室にする必要があるからで、各寢室を最大限に使用出来るとは限らないのであります。

例を両親、子供一人、成人男女各一人の五人家族にとると

両親と子供の寢室	6帖	} 12帖
成人男子	3帖	
成人女子	3帖	

この場合に3帖2間をとることは室の組合せからみても面白くないので最も都合のよいのは、6帖+4.5帖+3帖といふ形が好ましくなるであります。計算では12帖でも実際の最少限は13.5帖となるのは止むを得ません。

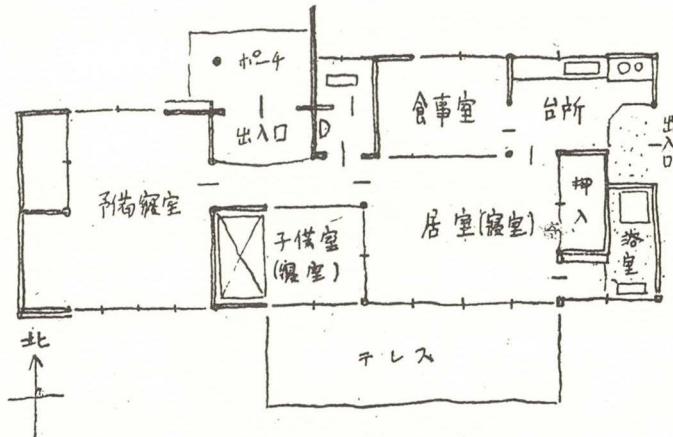
寢室の他にどんな居室が必要か

不時の來客とか家族に病人のある場合等の爲に豫備の室一つと、食事だけの目的で小室を一つ考へて置くことが必要になります。

尤も食事室は寢室と兼用する條件まで引下げてよいのですが衛生と設備の點から考へて食事室をとることは合理的な要求としてよいのであります。

こゝに子供室とか老人室を取り上げないのは何れも寢室と兼用する設備で差支へないからであります。

斯くの如く居室の廣さと室數についての最少限の條件を考へることが住める家としての當然の資格と云へませう。(以下次號)



(例) 独立した寢室を3室有つた
(南面向住宅)

疊 * 家具

日本建材工業株式會社
大阪營業所

大阪市南區順慶町通三ノ十・電話土佐堀(44)―926番

執 筆 者 紹 介

兼 岩 傳 一
北 條 秀 一
西 山 卯 三
山 本 一 人
末 政 清 子
伊 豆 肇
柴 谷 邦
竹 内 さ く

参 議 院 議 員
〃 國土計畫常任委員
京大助教授 工博
南海ホークス野球團員
元大阪府立女專助教授
東寶俳優
日本女子大學助教授
神戸女學院專門學校教授

藤 原 義 一
鞍 馬 寒 平
石 田 一 松
梶 原 三 郎
伊 藤 正 文
稻 葉 房 藏
中 野 順 次 郎

彦根工業專門教授工博
見 學 記 者
衆 議 院 議 員
阪大醫學部教授 醫博
建築設備研究所長 工博
大阪府會副議長
都島工業高等學校教頭

・ 後 記 ・

新しい方向に出發した『建築と社會』の第一號を贈るに當り、豫て御熱心な激勵を頂いてゐた各方面の方々に厚く御禮を申し上げます。

『建築と社會』を單に會員の機關雜誌に止めないで廣く建築に關する文化雜誌として發行したいといふ希望は昨年の總會で一致した意見であつた。

この總意に基いて第一號の編輯にとりかゝつたのが二月早々であつたと思ふ。幸に各方面からの玉稿を得たので、この分ならば四月中に發行出來ると考へてゐたのであるが紙材と資金の點で一時進行が困難となるに至つた。そのために二ヶ月程徒らに日を送らねばならなくなつたことは本當に残念であつた。今後はうまく行くとと思ふので御諒承を願ふ次第である。

内容は御覽の通り今迄とは調子を變へた積りである。執筆を煩はした方にもその積りで工夫をお願いしたのであるが、今後は更に範圍を廣めて、建築に關し御理解の深い各層の方の協力をお願いする積りである。

既に次號を進めてゐるので第三號からは一般の御投稿も載せることが出來るとと思ふ。新しい建築の紹介とか、御研究になつた技術的の試みとか、本誌を通じて建築文化の發展に資して頂ければ幸ひである。次號には復興建築の例をとりあげて報告、解説批評等、相當具體的な問題を扱つてゐるので大いに御期待願度く、尙讀者數を多くして、實質的に安い雜誌とするために各方面への御紹介を希ふ次第です。本誌に對する御希望、注文、批評等もごしごし御寄せ下さい。早くも若葉から新緑へ、たくましい夏の如く、編輯員も大いに頑張る積りです。(編輯子)

建 築 と 社 會

第 29 輯 第 1 號

賣價1部金40圓(送料共)

昭和23年7月25日印刷・昭和23年7月28日發行

編輯發行人 戸 川 弘

發 行 所 社團 日 本 建 築 協 會
法 人

大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル

電話 { 土佐堀 ④ 1836・3631番

{ 北 濱 ② 1334 ~ 9 番

振 替 口 座 大 阪 39975 番

大 阪 市 東 區 北 濱 三 丁 目 七
印 刷 人 兒 島 明

大 阪 市 東 區 北 濱 三 丁 目 七
印 刷 所 兒 島 印 刷 株 式 會 社

S.S.S.

復興建築に

G,S 石膏プaster

(國產唯一の壁材料)

焼 石 膏 ・ 白 黒

サンエス石膏株式會社

姫 路 市 神 屋 町 四 ノ 七 七

電 話 姫 路 1220 番

●第二九集 第一号 掲載広告一覽(掲載順)

大林組
錢高組
竹中工務店
鴻池組
清水建設
大成建設
松村組
藤木工務店
三建工業
橋本組
安藤組
木村組
浅沼組
藤田組
島藤建設
戸田組
池田組
長建設
鹿島建設
問組
勝呂組
佐藤工業

鐵道建設興業
奥村組
朝日土木興業
新工務所
太平建設工業
市村組
安井建設
藤組
日新建設工業
国光復建
森本組
南海土木建築
望月組
日東工務店
松浦工務店
あめりか屋
大和建設工業
都建設工業
佐藤組
大森工業
横田工務店
細川建築工務店

平和組
日本建設産業
岡組
池上建築事務所
飯田組
八木工務店
ツバサ屋工務店
小坂井組
ミラノ工務店
林組
東海電気工事
芦田電業社
田辺工業
共立電気工事
旭電業
八千代電機工業
ヤマト電気商会
三興社
新高砂商会
第一工業
旭工機
大和工業
大阪電気商会
大阪暖房商会

三沢商会
畠山工業
阪神復興工業所
朝日工業社
山田工務店
桐田商会
西原衛生工業
斎藤久孝
東洋キヤリヤ工業
内外通商
清水工業所
今西商会
三晃商会
興安水道
大洋工業
栄興商会
大阪城口研究所
槇山興業
関城化学工業所
オリエンタルメタル製造
大光洋行
大一低温工業所
新興工業所
明星工業

内外アスベスト
大阪パッキング製造所
報国工業
マルエス工業所
鼎直一商店
久保商店
大野保冷工業所
栗山硝子店
村田硝子店
武田屋硝子店
山本商店
岡部直次郎商店
辰巳吉商店
大阪新興商会
吾妻製作所
鈴木工務所
毛利商店
浪花工房
四ツ橋製材所
福生林材工業
日東建装社
くろふね工芸社
二葉屋
三芸社

川岸窯業商店
平田タイル
⊕タイル営業所
藤本タイル営業所
淡陶
関西植木
大阪植木
川崎庭園創作所
和光工業
小野弥商店
満点製作所
三高製作所
安田工業
生田商店
中央商会
大日建工所
美和産業
美素工業所
土建材工協会
東工社
利倉幸商店
金剛測量製図器製作所
中川ラス製作所
日本スレート

大阪スレート工業
藤堂貞商店
東洋建築板
石田建材店
ライトラバー興業
明正社
大仏組
ナニワ瓦
神谷組建材
近畿地区セメント瓦工業協議会
福田源
神治屋
佐村木商店
瓦会社
関西建材工業
和泉工業
新興建材工業所
濱田竹材店
勢山竹材店
豊中建材店
吉川時松商店
協和建材工業
東建商会
近藤商店

矢野茂次商店
福島商事
室谷商店
建材社
大和商会
日新建材
日本竹材工業
西林石材工業
ベニヤ商会
東洋陶器
東洋瓦産業
奥村重兵衛商店
河津裝飾
山本窯業
竹林塗装工業
玉置孝太郎商店
やよいスレート
浅海電気産業
大阪城口研究所
明装興業
舞鶴木工
大阪窯業セメント